

大阪市中央区

瓦屋町遺跡発掘調査報告

新高津ビル建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009.11

財団法人 大阪市文化財協会

the 'information' and 'communication' fields, and the 'information science' field.

It is important to note that the 'information science' field is not a new field, but a new name for an existing field. The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

The 'information science' field is a new name for the 'information science' field.

大阪市中心区

瓦屋町遺跡発掘調査報告

新高津ビル建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009.11

財団法人 大阪市文化財協会

『瓦屋町遺跡発掘調査報告』正誤表

ページ	位置	(誤)	(正)
例言	L.1	本書は、財団法人大阪市文化財協会が株式会社NTTファシリティーズの委託を受け、	本書は、財団法人大阪市文化財協会が西日本電信電話株式会社から依頼を受けた株式会社NTTファシリティーズの委託を受け、
例言	L.4	発掘調査と報告書作成の費用は、株式会社NTTファシリティーズの負担による。	発掘調査と報告書作成の費用は、西日本電信電話株式会社の負担による。
凡例	項目6	豊臣氏大坂城後期(豊臣前期)	豊臣氏大坂城後期(豊臣後期)
16・19	図13・表2	7=SK70	7=SK01
17	図14	19=SK82	19=SE60・SK61
17	図14	26=攪乱その他	26=現代井戸
23	図20・表4	123=SK01	123=SK82
23	図20・表4	124=SK82	124=SK01
25	表5	156=その他	156=SK70
26	図23	刻印4拓影	
26	表6最下行	刻2	刻20
27	図24	159=SK70	159=SK82
28	図25	(cm)	(mm)
37	L.16	丹波焼の甕256	信楽焼の甕256
37	L.28	近世九州陶磁学会	九州近世陶磁学会
37	L.32	肥前染付磁器	肥前磁器染付
38	L.21	314=下半は露胎である。	314=下半は錆軸である。
38	L.29	SK39は新しく、肥前磁器端反碗や...	SK39は新しく、瀬戸美濃焼磁器端反碗や...
42	L.24	342	332
52	表8	SK70の合計=35	SK70の合計=36
52	表8	その他の合計=9	その他の合計=8
53	図40	444=SK86	444=SK82
58	註(6)	近世九州陶磁学会	九州近世陶磁学会
索引		独楽...4, 48	独楽...44, 48
索引		「し」四方禪文	「よ」四方禪文



「神咒寺灌頂堂」瓦范

大阪市中央区

瓦屋町遺跡発掘調査報告

新高津ビル建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009.11

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は大阪市中央区の瓦屋町遺跡において、初めて行われた発掘調査の報告書である。

江戸時代の大坂は商業・金融業のまちとして、全国の経済で大きな役割を占めるが、各種製造の活発な工業生産都市としての性格もあわせもつ。私たちは遺跡の発掘調査を通じ、住友銅吹所跡で銅精錬業を、堂島蔵屋敷跡で製陶業などを報告し、その一端を紹介してきた。

本書に登場する瓦屋町は、その名前が示す通り、江戸時代に徳川幕府の御用瓦師寺島家が居を構え、配下の瓦工に膨大な量の瓦を生産させたとされる地域である。発掘調査では、窯などの遺構は確認できなかったものの、多量の瓦とその生産に係わる一部の道具が見つかった。これは今後、大坂における江戸時代の瓦を研究するうえで、基礎的な資料となろう。

また瓦以外にも、陶器・土人形・ベンガラ・金属加工品などの製品生産に係わる資料も見られた。このことは、当地が大坂の各種工業の実態を解明するために、きわめて重要な地域であることを明確に物語っている。

さまざまな製造業が複合する当地の解明は、まだその緒についたばかりであるが、本書ではこれらの成果を極力網羅し、報告することで、大阪の産業史研究に少なからず寄与できることと確信する。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、数々のご尽力をいただいた関係各位に厚く御礼を申し上げる。

2009年11月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、財団法人大阪市文化財協会が株式会社NTTファシリティーズの委託を受け、2008年11月13日～12月26日に中央区瓦屋町一丁目で実施した新高津ビル埋蔵文化財本発掘業務(WR08-1次、WRは瓦屋町遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、株式会社NTTファシリティーズの負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長 南秀雄、およびその指揮のもとで文化財研究部事業企画担当課長代理 清水和明が主として担当した。調査の期間・面積は第I章に記す。
- 一、本書の編集は、南・難波宮調査事務所長 高橋工の指揮のもと、主として清水が行った。遺物に関する事実報告の執筆は瓦埴類(第II章第3節第1項)を文化財研究部主任学芸員 黒田慶一が、陶磁器・土器類(同第4項)を同部学芸員 宮本佐知子が、陶器生産関連資料(同第5項)を同部事業担当係長 佐藤隆が、ミニチュア土製品と生産関連資料(同第6項)を同部学芸員 川村紀子が、ベンガラ生産関連資料(同第7項)の文献史料に関して同部学芸員 池田研が、金属加工関連資料ほか(同第8項)を同部保存科学担当係長 伊藤幸司が、動物遺体(同第9項)を同部学芸員 池田がそれぞれ分担し、他は清水が行った。またベンガラの試料分析を、独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所 保存修復科学センター 伝統技術研究室室長 北野信彦氏に依頼し、その結果の原稿を頂いた。また、地層と遺物の検討を行う第三章では、上町台地北部の崩壊性地すべりとその年代について(第1節)を同部研究副主幹 趙哲済が、瓦の検討(第2節)を黒田が、近世における瓦屋町周辺の陶器生産(第3節)を佐藤が執筆した。英文目次・要旨は大阪歴史博物館企画広報課学芸員 宮本康治が作成した。本書の用字用語や体裁などの調整は、文化財研究部技術管理担当課長 田中清美、高橋、清水、佐藤、同部学芸員 小倉徹也らの報告書校正委員が行った。
- 一、瓦および瓦質製品・道具類の理解には小林伝統製瓦 小林義一氏から、陶器土型には京都国立博物館 尾野善祐氏、大阪市立美術館 守屋雅史氏から、鋳造関連遺物には関西大学 吉田晶子氏、京都橋大学 五十川伸矢氏、大阪芸術大学 中島保美氏からご助言やご教示を得た。記して深謝する次第である。
- 一、本書における試料の自然科学分析については、上記のとおりベンガラの試料分析を北野信彦氏に依頼し、また、崩壊した地層中の炭化物試料の放射性炭素年代測定をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 一、基準点測量は株式会社アジア航測に委託した。
- 一、遺構写真は主として清水が撮影し、遺物写真の撮影は阿南写真工房 阿南辰秀氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、補助員諸氏から多くの援助を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語、および断面図に示した岩相のパターンは、[趙哲済1995]に準じる。
2. 本書における地層名は第○層と表記する。また、各遺構埋土の地層名は「第」をとって○層とのみ示し、調査地の地層名と区別する。
3. 遺構名の表記は、溝(SD)、井戸(SE)、土塋(SK)、小穴(SP)の分類記号の後に、通し番号を付している。
4. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。また、挿図中の方位は、図1・2は真北、それ以外は座標北を使用した。
5. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1967]に拠った。
6. 本書で使用する近世の時期区分は、これまでの大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果をもとに下記の区分を採用した。
豊臣氏大坂城前期(豊臣前期) 本願寺焼亡(1580(天正8)年)から大坂城三ノ丸築城開始(1598(慶長3)年)まで
豊臣氏大坂城後期(豊臣前期) 三ノ丸築城から大坂夏ノ陣(1615(慶長20)年)まで
徳川氏大坂城期(徳川期) 大坂夏ノ陣以降

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1) 調査に至る経緯	1
2) 調査の経過	1
第Ⅱ章 調査の結果	3
第1節 層序	3
第2節 遺構	7
1) 徳川期の遺構	7
第3節 遺物	14
1) 瓦埴類	14
2) 瓦生産関連資料	27
3) 用途不明瓦質製品・道具類	29
4) 陶磁器・土器類	32
5) 陶器生産関連資料	39
i) 陶器土型	ii) 窯道具
iii) 窯体片	iv) 素焼き陶片
6) ミニチュア土製品と生産関連資料	44
7) ベンガラ生産関連資料	48
i) 焙烙	ii) 文献史料
iii) ベンガラの分析結果	
8) 金属加工関連資料ほか	51
i) 鋳造	ii) 鍛冶
iii) 銅精錬	iv) 真鍮生産
9) その他の遺物	57
10) SK82出土具類	57

第Ⅲ章 地層と遺物の検討	59
第1節 上町台地北部の崩壊性地すべりとその年代について	59
1) 上町台地北部の崩壊性地すべり	59
2) 地すべり崩壊物の放射性炭素年代	60
第2節 瓦の検討	62
第3節 近世における瓦屋町周辺の陶器生産	64
1) 遺構ごとの出土傾向	64
2) 製品の内容とその系譜	64
3) 小結	66
第Ⅳ章 まとめ	67
引用・参考文献	69

あとがき

索引

英文目次

英文要旨

原色図版目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 陶磁器・土器類</p> <p>上：SK35出土陶磁器・土師器</p> <p>下：SK70出土陶磁器</p> <p>2 陶器土型・素焼き陶片</p> <p>上：製品側の面(右下358のみ素焼き陶片)</p> <p>下：上と反対側の面</p> <p>3 陶器生産の窯道具・ベンガラ生産関連資料</p> <p>上：トチン類・円錐ビン・棒状土製品</p> <p>下：ベンガラを焼いた焙烙</p> | <p>4 ミニチュア土製品</p> <p>上：SK82出土ミニチュア土製品</p> <p>下・左上：ミニチュア土製品の型(動物)</p> <p>下・右上：ミニチュア土製品の型(箱庭・飯事)</p> <p>下・中下：SK35出土ミニチュア土製品(絵銭)</p> <p>5 铸造銅製品の鋳型</p> <p>上：竹形・龍頭・乳・銘文・捺座・唐獅子の鋳型(込型法)</p> <p>下：粗型・鋸口(挽型法)、獸脚(込型法)</p> |
|--|--|

図版目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 調査区全景・西区 徳川期の遺構(1)</p> <p>上：西区全景(南から)</p> <p>中：東区全景(南から)</p> <p>下：西区北部遺構群(東から)</p> <p>2 西区 徳川期の遺構(2)・崩壊を示す地層断面</p> <p>上：南部遺構群(北東から)</p> <p>中：SK01の埋土堆積状況(西から)</p> <p>下：深掘りトレンチ地層断面(東から)</p> <p>3 東区 徳川期の遺構(1)</p> <p>上：東部遺構群(北東から)</p> <p>中：SK69の埋土堆積状況(南から)</p> <p>下：SK70の埋土堆積状況(北西から)</p> <p>4 東区 徳川期の遺構(2)・崩壊を示す地層断面</p> <p>上：SK82の埋土堆積状況(南東から)</p> <p>中：深掘りトレンチ地層断面(南西から)</p> <p>下：崩壊物層中の炭化物堆積層(南西から)</p> | <p>5 徳川期の瓦</p> <p>上：軒平瓦・軒棧瓦・一文字瓦・鎌瓦</p> <p>下：鯉面戸瓦・蟹面戸瓦・鳥衣繋ぎ瓦・雁振瓦ほか</p> <p>6 用途不明瓦質製品・道具類</p> <p>上：用途不明瓦質製品・道具類(1)</p> <p>下：用途不明瓦質製品・道具類(2)</p> <p>7 瓦質の陶器土型</p> <p>上：製品側の面</p> <p>下：上と反対側の面</p> <p>8 陶器生産の窯道具ほか・ミニチュア土製品</p> <p>上：匣鉢・棚板・窯体片</p> <p>下：ミニチュア土製品(瓦質)</p> |
|--|---|

挿 図 目 次

図 1	瓦原町遺跡の位置	1	図 24	支脚型瓦竈道具実測図	27
図 2	調査地と周辺遺跡	2	図 25	遺構別の竈道具の大きさ	28
図 3	徳川期の絵図に示された寺島家請地	2	図 26	竈道具の使用法	28
図 4	調査区位置図	3	図 27	用途不明瓦質製品実測図①	30
図 5	西区地層断面図（南壁・西壁一部）	4	図 28	用途不明瓦質製品実測図②	31
図 6	東区地層断面図（北壁）	5	図 29	陶磁器・土器実測図①	33
図 7	東区地層断面図（東壁）	6	図 30	陶磁器・土器実測図②	34
図 8	徳川期の遺構（西・東区）	8	図 31	陶磁器・土器実測図③	35
図 9	遺構断面図①	9	図 32	陶磁器・土器実測図④	36
図 10	遺構断面図②	10	図 33	陶器土型・素焼き陶片実測図	40
図 11	遺構断面図③	11	図 34	竈道具・窯体片実測図	41
図 12	遺構断面図④	12	図 35	ミニチュア土製品①	45
図 13	軒丸瓦実測図①	16	図 36	ミニチュア土製品②・同土型	46
図 14	軒丸瓦実測図②	17	図 37	SK01 出土焙烙実測図①	49
図 15	軒丸瓦実測図③	18	図 38	SK01 出土焙烙実測図②	50
図 16	軒丸瓦実測図④	19	図 39	ベンガラ試料写真と分析結果	51
図 17	横文線分類図	20	図 40	銅製品鋳型実測図①	53
図 18	軒平瓦・隅唐草実測図	21	図 41	銅製品鋳型実測図②	54
図 19	軒棧瓦	22	図 42	銅製品鋳型実測図③・その他	55
図 20	一文字瓦	23	図 43	調査地を通る東西地質断面図	59
図 21	菊丸瓦・その他の瓦実測図	24	図 44	上町台地北部の推定地すべり地形分布図	61
図 22	鬼瓦・飾瓦・留蓋実測図	25	図 45	龍門寺開山堂の龍紋軒丸瓦	62
図 23	瓦の刻印集成	26			

表 目 次

表 1	おもな遺構の時期と共伴遺物	7	表 6	刻印瓦一覧	26
表 2	軒丸瓦出土遺構一覧	19	表 7	ミニチュア土製品一覧	47
表 3	軒平瓦出土遺構一覧	20	表 8	金属加工関連資料出土遺構一覧	52
表 4	軒棧瓦・一文字瓦出土遺構一覧	23	表 9	放射性炭素年代測定結果および暦年校正結果	60
表 5	菊丸瓦・鬼瓦ほか出土遺構一覧	25			

写 真 目 次

写真 1	西区の発掘調査（北西から）	2	写真 3	焼け歪んだ瓦（SK82 出土）	29
写真 2	支脚型瓦竈道具	27			

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

1) 調査に至る経緯

瓦屋町遺跡は大阪市中央区瓦屋町に位置する(図1)。

徳川期の南瓦屋町に当り、従来の研究では豊臣氏大坂城惣構の西南部と推定される範囲の南外に接している(図2)。惣構は現在でも調査地の北100m余りに「空堀通」としてその名前を残している。

「瓦屋町」という地名は、その名のとおりこの地に存在した瓦屋に由来する。1615(元和元)年に大坂在住の瓦師惣左衛門休清が、大坂ノ陣の功によって徳川家康からこの地に46,000坪を拝領し、ここで瓦窯業を開始したとされている[大阪市史編纂所1984]。以降、徳川期末にかけて、当地には瓦師の屋敷、瓦細工場、瓦置場、瓦土採り場が築かれた。また、1748(延享5)年刊の『難波丸綱目』には瓦師「寺島藤右衛門」の名がみえ[多治比郁夫・日野龍夫編1977]、1688(元禄元)年の『辰歳増補大坂図』にも「瓦師藤右衛門請地」として瓦屋町に寺島家の本拠があったことを伝えている(図3)[佐古慶三1970]。このように一帯は「御用瓦師」寺島家を中心とした瓦生産が盛行した地域とされるが、従来、発掘調査が行われたことはなく、今回が初めての実施となった。

2) 調査の経過

平成20年8月3日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、敷地東部の現地地表下1.4mで埋土に瓦を含む近世の遺構が見つかり、11月13日から発掘調査を開始した。

残土を場内に仮置きするため、調査区を東西に2分し、西区から行った(第Ⅱ章：図4)。西区の南部は以前に

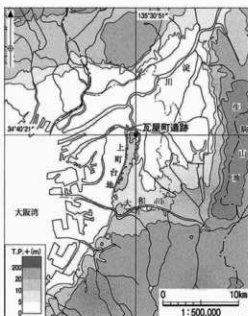


図1 瓦屋町遺跡の位置

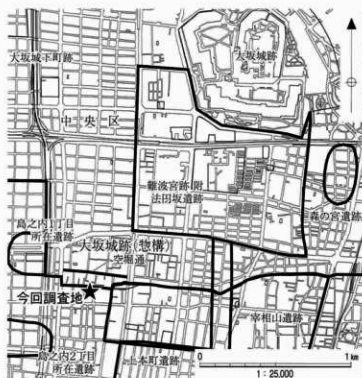


図2 調査地と周辺道跡

地層を確認した。その結果、徳川期の遺構面の下位は、巨大な偽礫が多数混り合う大規模な再堆積層であることが判明し、遺構の検出が不可能なことが判明したため、翌4日に西区を埋戻した。なお、11月27日には調査状況と同日までの成果について事業主への説明を行った。

東区は12月6日から12月25日まで調査を行った。東区の大半は現代の攪乱によって徳川期の遺構面



図3 徳川期の絵図に示された寺烏家請地
〔「辰蔵増補大坂図」1688(元禄元)年 佐古慶三1970、「古
板大坂地図集成」、清文堂出版株式会社 から部分転載〕

地下施設が存在したとされる場所で、始めに該当部分を重機で現地地表下4mほどを掘削した。予想どおり現代の攪乱によって遺物包含層は失われていたが、攪乱層の北壁面で、近世瓦と焼土が混る遺物包含層を観察することができた。

そこで、11月14日・15日に攪乱層を埋戻し、残る北側で厚さ140cmほどの現代盛土を重機掘削し、以下を人力で精査・掘削して徳川期の遺構と遺物を検出した。11月20日に委託による基準点測量を実施し、当該層準で図面および写真などの記録を作成したのち、12月3日に深掘りトレンチを入れて現地地表下約5.5mまでの

が削平されていたが、残された場所で多量の瓦を含む大型土壌などを調査し、その後、20日から深掘りトレンチを掘削して下位の再堆積層を調査した。26日に埋戻しおよび機材の撤去を含めたすべての作業を終了した。東・西両区の調査面積は、合計500㎡である。



写真1 西区の発掘調査(北西から)

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

前章で述べたとおり、徳川期の整地層とそれをベースとする遺構群の下位に、大規模な崩壊による再堆積層が確認された。地層の観察箇所とその結果は図5～7に記載した。

層序を大別すると以下の3層となる。

第0層：グリ石を盛った現代の整地層で、調査地の全面に及んでいる。層厚は40～120cmで、北部では薄く、南部で厚く堆積している。

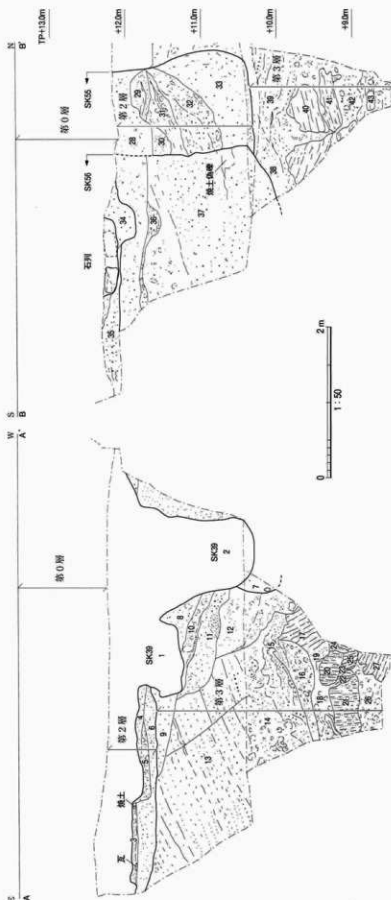
第1層：上部は暗褐色シルト質中粒～粗粒砂、下部はオリーブ褐色～暗灰黄色中粒砂で、どちらも整地層である。上部は現代のコンクリート管を含み、下部は遡って明治時代までの遺物包含層である。東区北部から東部にかけて比較的良好に残り、層厚60cm程度になる。西区南部では第0層による造成時に削平されたものとみられ、残っていない。

第2層：徳川期の整地層と遺構埋土が相当する。整地層は第3層を起源とするもので、黄褐色中粒砂を主体とし炭化物や焼土を多く含む。層厚は30cm程度である。観察された箇所は西区南部(図5)など限られた範囲であり、遺物も少量である。遺構埋土には17世紀末から19世紀前半にかけてを中心とする遺物が包含されている。

第3層：調査地の全域にわたっており、層厚は370cmまでを観察したが、基底は確認できなかった。大きく上下に区分でき、上部は比較的小さなシルト～粘土の偽礫を多量に含む中粒砂を主体とする地層で、下部は長辺の長さが3mを超える粘土偽礫が混在する粗粒～極粗粒砂層である。層中には瓦器細片を含む地層の偽礫や、豊臣期の軒丸・軒平瓦片を含む炭化物・焼土層が含まれるが、全体が、いったん堆積した地層が崩壊し、二次的に堆積した崩壊物層である。調査ではその一部を認めたにとどまるが、相当に規模の大きい現象であったことが推測され、その原因や発生した年代については第Ⅲ章で検討を行う。



図4 調査区位置図



- 【第0層】**
- 0: 灰白色中礫(タリ石)
 - 1: オリーブ褐色(25Y4/4)シルト質中粒砂(SK39 覆土)
 - 2: 灰褐色(10YR2.2/2)セメント質中粒砂(SK39 覆土)
 - 3: SK39 覆土
 - 4: 黄褐色(10YR2.6/4)中粒砂
 - 5: 灰褐色(10YR2.5/4)中粒砂
 - 6: 明黄褐色(10YR6.6/4)中粒砂
 - 7: 黄褐色(10YR5.6/4)中粒砂
 - 8: 含粘土砂礫、明黄褐色(10YR5.6/4)中粒砂
 - 9: 明黄褐色(10YR6.5/4)中粒砂
 - 10: 含粘土砂礫、明黄褐色(10YR6.5/4)中粒砂
 - 11: 黄褐色(10YR5.6/4)中粒砂
 - 12: 黄褐色(10YR5.6/4)中粒砂
 - 13: 黄褐色(10YR5.6/4)中粒砂
 - 14: 明黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 15: 明黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 16: 明黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 17: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 18: 含粘土砂礫、灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 19: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 20: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 21: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 22: 明黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 23: 明黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 24: 明黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 25: 明黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 26: 含粘土砂礫、灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 27: 黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
- 【第2層】**
- 28: 黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 29: 黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 30: 黄褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 31: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 32: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 33: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 34: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 35: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 36: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 37: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 38: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 39: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 40: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 41: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 42: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 43: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 44: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 45: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 46: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 47: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 48: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 49: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 50: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 51: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 52: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 53: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 54: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 55: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 56: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 57: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 58: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 59: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 60: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 61: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 62: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 63: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 64: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 65: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 66: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 67: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 68: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 69: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 70: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 71: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 72: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 73: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 74: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 75: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 76: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 77: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 78: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 79: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 80: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 81: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 82: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 83: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 84: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 85: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 86: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 87: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 88: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 89: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 90: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 91: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 92: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 93: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 94: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 95: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 96: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 97: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 98: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 99: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂
 - 100: 灰褐色(10YR2.4/4)中粒砂

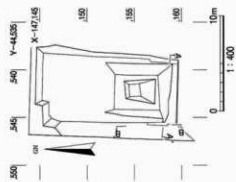


図5 西区地層断面図(南壁・西壁一部)

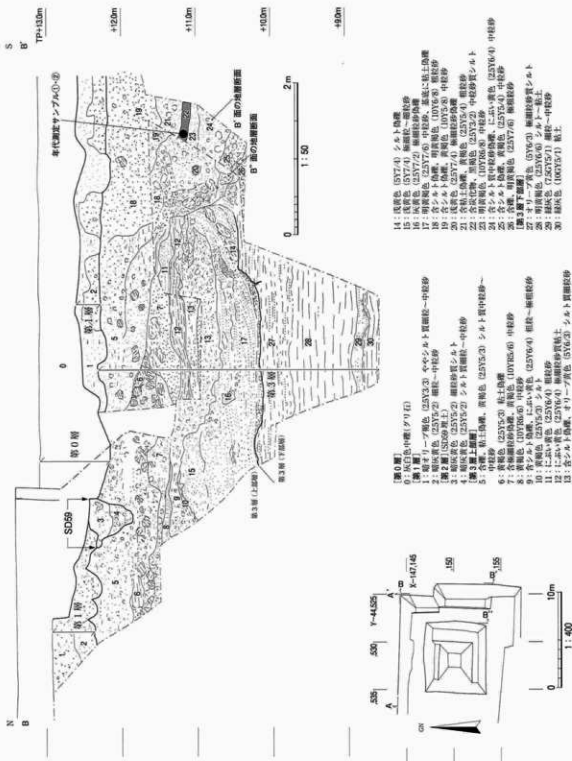


図7 東区地層断面図(東壁)

第2節 遺構

1) 徳川期の遺構

西・東調査区で見つかった遺構には、土壌・井戸・溝・小穴・石列がある(図8)。すべて徳川期の遺構で、陶磁器などの遺物からは17世紀末から19世紀前半にかけて形成されたものといえる。第1章で既述したように、当該地が瓦窯の操業や土採りに関連する場所である可能性は高いが、一部で基底が熱を受けている可能性のある遺構(SK23)が存在するものの、明確な窯跡などは確認できなかった。一方で、遺構の埋土には焼土偽礫や炭が多く含まれており、周囲で火を使う作業が行われていたらしい。

調査区を大きく南北に分けると、北側に大型の土壌が並ぶ傾向がある。そのうち、SK01・02・06・70・82は、平面形をほぼ東西南北に合わせた方形ないし長方形で、検出面からの深さが1.0~2.0 mにおよぶ大型のもので、埋土には瓦が大量に詰まっているなど、おもに瓦の廃棄を目的としたものと考えられる。一方、西区南半では、南からSK23・38・45のような東西方向に長軸を持つ土壌のほか、

表1 おもな遺構の時期と共存遺物

	遺構	時期	瓦・瓦生産		用途不明 瓦質製品	ベンガラ 生産	陶器 生産	ミニチュア土製品		金属加工品生産			
			瓦	瓦産道具				型	製品	鋳造	鍛冶	銅精錬	真鍮生産
西区	SK01	18C後葉-19C前葉	○	○	○	○	○		○	○			
西区	SK02	18C後半	○	○	○	○		○	○	○			
西区	SK03	18C後半	○	○	○						○		
西区	SK06	18C後半	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
西区	SK07	17C末~18C初			○								
西区	SK08	18C後半	○				○						
西区	SK09	18C後葉-19C前葉	○			○			○				
西区	SK11	18C後半	○			○							
西区	SK13	18C後葉-19C前葉	○	○		○			○				
西区	SK15	18C前半	○				○			○			
西区	SK17	18C後半	○		○		○	○	○				
西区	SK19	18C前半							○				
西区	SK23	18C後半	○			○	○		○				
西区	SK26	18C後半			○								
西区	SK29	18C後半	○		○				○				
西区	SK33	18C前半	○				○			○			
西区	SK35	18C前半	○						○				
西区	SK38	19C前半	○		○				○		○		
西区	SK39	19C前半	○				○	○	○	○	○		
西区	SK40	18C後半	○							○			
西区	SK44	17C末~18C初	○										
西区	SK45	18C後半	○		○				○				
西区	SK46	19C前半	○	○									
西区	SK55・56	18C後葉-19C前葉	○				○	○	○				
東区	SE60	19C	○							○			
東区	SK69	19C前半	○		○		○			○			
東区	SK70	18C後葉-19C前葉	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
東区	SP71	19C前半											
東区	SK72	19C前半	○										
東区	SK73	18C後葉-19C前葉				○			○				
東区	SK78	19C前半				○	○						
東区	SK80	18C				○			○				
東区	SK82	18C後葉-19C前葉	○	○	○	○		○	○	○			
東区	SK86	18C後半	○			○	○		○	○	○		
調査区側溝・遺構検出中など			○	○		○	○	○		○			○

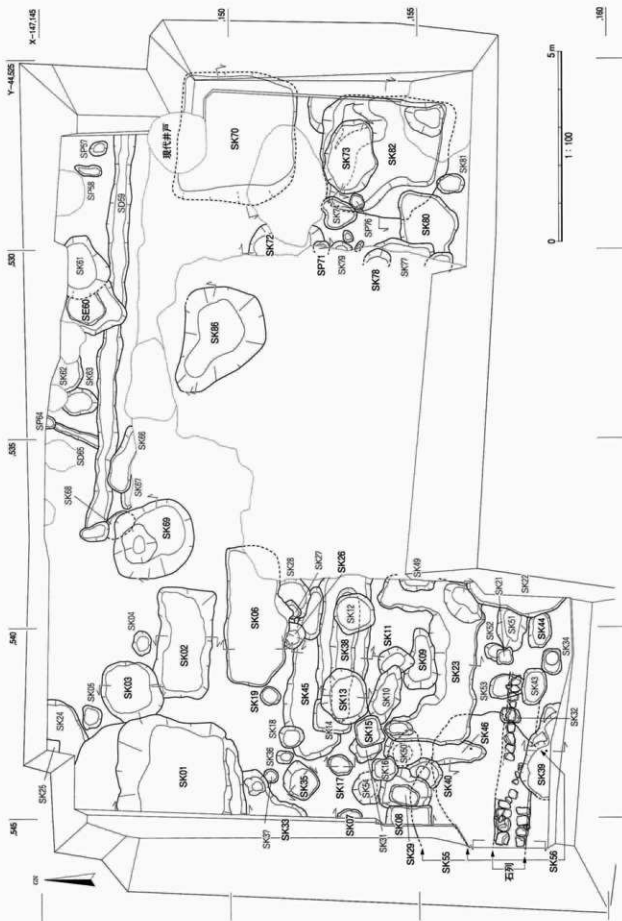


図8 徳川期の遺構(西・東区)

大きさが1.0m内外の比較的小型の土壌が切合いながら密集して掘削されており、やや様相を異にする。さらに、南端付近では東西方向の石列が作られているが、19世紀の前半にその一部が土壌によって壊されている。また、東区北部には瓦組のSE60があり、その南側に東に向かって基底が低くなるSD59が東西に延びている。このように、調査区の場所によって敷地の利用方法が異なり、時期によって変化していたことが窺える。

以下、上記の中からおもな遺構の状況を記すが、先に第3節で記述する陶磁器・土器類の検討結果からその時期を、また、他の特徴的な遺物の共存関係を表1にまとめておく。なお、遺構の大きさに係わる数値はすべて検出面を基準とするものである。

SK01(図9、図版2) 調査区の西北隅にあり、南北3.08mで、西辺が調査区外にあって未確認だが、東西に長い方形となる。深さは1.76mである。断面により北側から土壌内に大量の瓦が放棄され、その過程で、ベンガラ生産に使用された焙烙片が一括廃棄されたことが認められた。

SK02(図9) SK01の東側に隣接し、平面形は長軸をほぼ東西に合わせた長方形である。長さは2.90m、幅は1.58m、深さは0.82mである。遺構の立ち上がりは垂直に近く、基底も平坦に掘られている。埋土は一連の堆積物で埋戻され、瓦を多量に含んでいる。SK03によって切られている。

SK03(図9) SK01の東北に接し、SK01によって切られている。平面形は直径1.60mの円形で、深さは0.97mである。埋土には瓦を多く含んでいる。

SK06(図10) SK02の南に近接し、平面形は長軸をほぼ東西に合わせた長方形である。長さは3.70m、幅は1.50m、深さは2.08mである。基底から検出面の下位約0.40mまで、大量の瓦やベンガラ生産用の焙烙を一気に廃棄した後、その上位を黄褐色極粗粒砂で埋めている。

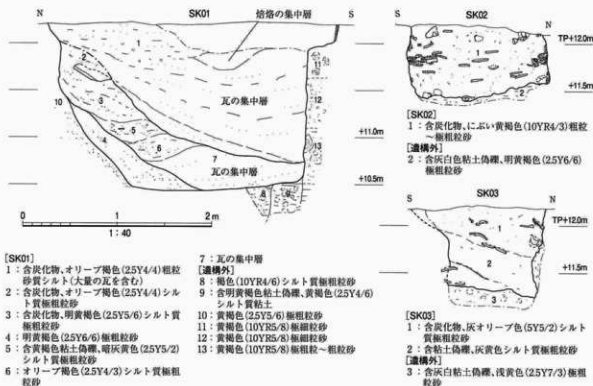


図9 遺構断面図①

SK09(図10) 西区の中央やや南にあって、南側のSK23より新しく、北のSK11より古い。平面形は東西に長い長方形で、長さ1.60m、幅は0.86m、深さは0.48mである。埋土の基底は極粗粒砂を主体とする埋戻し土で、その上位に焼土とベンガラ生産用の焙焙片が一括で廃棄されている。その上位は黄褐色ないしオリブ褐色中粒～極粗粒砂で埋戻されている。

SK11(図10) 長径1.05m、深さ0.20mで、西側をSK10によって壊されている。焼土・炭化物と灰

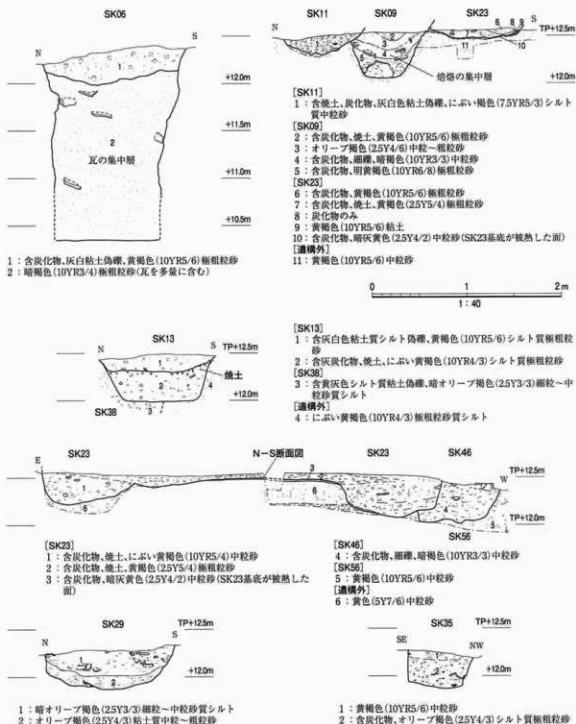


図10 遺構断面図②

白色粘土偽礫を多量に含む地層で埋戻されている。

SK13(図10) 長径1.47m、短径1.24m、深さ0.50mで、埋土の下位2/3ほどは炭化物・焼土偽礫を

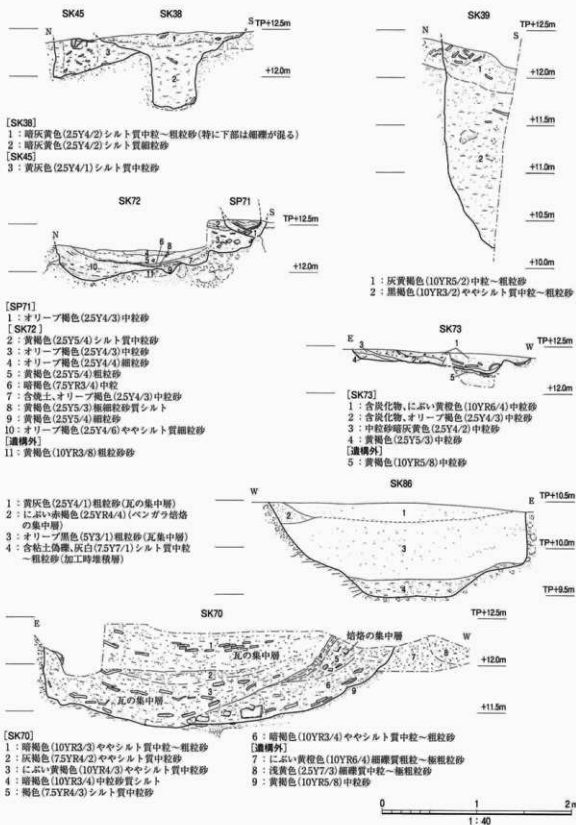


図11 遺構断面図③

多量に含む黄褐色シルト質極粗粒砂で埋められ、その上位は黄褐色極粗粒砂で埋められている。

SK23(図10) 西区の南部にあって、平面形は東西4.24m、南北2.8mの北に開いた「コ」字形となっている。東西端は、それぞれ幅約1m、深さ約0.5m凹んでいるが、間の埋土は焼土・炭化物を多量に含む一連の地層である。遺構の中央付近は、焼けて基底面がごく薄く暗灰色になっている。南辺では焼けた基底面の上に薄く黄褐色粘土を貼り、さらにその上に薄く炭化物が堆積しているのが観察されるが、埋められる前に削られていて、一部分でしか確認できない。この場所に火を使う施設が構築された可能性もあるが、残存状況が非常に悪く、詳細は不明である。

SK29(図10) 長径0.75m、深さ0.48mの土壌である。

SK35(図10) 長径0.76m、深さ0.40mの土壌である。埋土の下部は多量の炭化物を含む。

SK38(図11) 東側を現代の攪乱に、西側をSK13によって壊されているため、全長は不明だが、東西3.92mで、南北は1.85mの細長い土壌である。長軸に沿って、長さ3.55m、幅0.48mにわたり基底が約0.6m深くなる2段掘りの構造である。

SK39(図11) 西区南端にある土壌で南側は調査区外に続くため、全体の規模は不明である。東西2.6

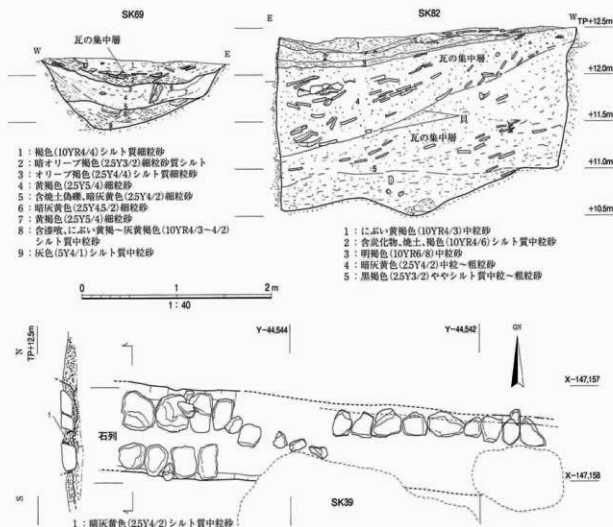


図12 遺構断面図④

m、深さ1.45mを調査した。

SK45(図11) 南側をSK38などによって壊されているため、全体の規模は明らかではない。北側の立ち上がりは垂直に近く、深さ0.41mで、底は南側へ緩やかに高くなっている。

SK55・56(図5 右、図版2) 西区南西隅にあり、西側は調査区外に続く大型の土壌である。全体の規模は不明であるが、第3層を確認する際の西壁面によって2基の土壌が切合っていることが判明した。遺物の取上げは一連で行っているため、後述する遺物の記述でも両土壌を一括して扱う。

石列(図12) 西区南端付近で東西に延び、西側では向かい合って面を描いているため、排水などに利用された石組溝とも考えられるが、内部に水漬きの堆積物は認められなかった。SK55・56が埋められてから構築されているため、敷地の利用状況の変化が考えられる。東側をSK39に壊されている。

SE60(図8) 直径1.50m瓦組の井戸である。東区北壁に接し、深さ1.60mまでを確認した。東側のSK61によって井戸側の一部が壊されていたが、当初は遺物を一括して取り上げたため後述する遺物の記述でも両遺構を一括して扱う。

SK69(図12、図版3) 直径1.96m、深さ0.76mの土壌である。下位2/3は細粒～中粒砂を主体としている。上位には瓦を多く含み、下位に焼土偽礫を多く含む。

SK70(図11、図版3) 東区北部東端に位置する。北側は現代の井戸で壊されているが、1辺3.7m程の方形に近い平面形に復元できる。深さは約1.1mである。東側の立ち上がりは垂直に近く、底はやや東側に最深部が寄っている。西側の立ち上がりは緩やかである。埋土には大量の瓦や部分的にベンガラ生産用の焙烙が投棄されているが、西側から東側に順次投げ入れたことが埋土から観察される。土壌の立ち上がりや底の形状などを合わせると、この土壌が敷地の東端にあって、不要となったゴミが集積的に廃棄されていた土壌であったと考えられる。なお、南のSK82も似た特徴を持っている。

SP71・SK72(図11) 東区中央の大きな攪乱によって壊されている。SP71には産地不詳の甕が正置した状態で見つかり、便所であった可能性がある。

SK73(図11) SK82の上位にあり、長径1.88m、深さ0.20mの浅い土壌である。検出時にSK82と切合い関係があるとみたが、SK82を最終的に埋戻した時の埋土の違いによるもので、本来は同一遺構の可能性もある。

SK82(図12、図版4) 一辺が3.12m、深さ1.96mでほぼ方形となる土壌である。SK70と同様の平面規模だが、こちらがより深く、東西両方の立ち上がりも垂直に近い。ただ、底面は東側に向かって傾斜し、また、埋土の観察からも西側から瓦や焙烙などを投棄した状況がわかる。こうした特徴や遺物の時期もSK70とよく似ており、敷地内での廃棄物処理のため一連で掘削され、ゴミ捨てに使われた大型土壌と考えられる。なお、層中に貝が一括廃棄されたブロックがあり、採取・同定した。

SK86(図11) 長径2.72m、深さ1.04mの平面形は不定形な土壌である。当初、攪乱内にあったため検出できず、第3層を確認するトレンチを掘削した際に確認した。遺構の上位は攪乱によって相当が失われており、本来の平面形はSK70やSK86と同じような方形であった可能性も考えられる。埋土に瓦・焙烙を集積的に廃棄していること、東側が垂直に立ち上がり、西側が緩やかなことなども、廃棄用の大型土壌として共通する。

第3節 遺物

今回の調査地では、陶磁器などの日常雑器のほか、瓦とその生産に係わるものに加え、陶器・ミニチュア土製品・ペンガラ・金属加工品など多種多様な産業に係わる遺物が見つかった。そこで、本書では遺物の記載を遺構ごとではなく、それぞれの分野別に順次記述することとする。

1) 瓦埴類

徳川期の遺構の基盤になっている第3層から豊臣期の瓦が2点出土した。軒丸瓦35(図14)および軒平瓦66(図18)である。35は図5-左14層上部から出土し、珠文16個を圏線が囲む型式で豊臣前期に属する。66は図7-22層から出土し、左端の子葉のみが遺存するが、豊臣後期に属する可能性もある。

そのほかはすべて徳川期の遺構から出土し、寺島家配下の瓦工が作ったと考えられる。

小片でも全体復元の可能な范詰め成形である軒丸瓦・菊丸瓦は、1范=1型式を目指して型式分類した。しかし、軒平瓦や軒棧瓦軒平部は大半が橘文の均整唐草文(以下、橘文と略す)であり、酷似した同文異范瓦が存在するため小片での判断は困難である。そこで、図17の分類を試み、一覧表でその特徴と出土遺構の傾向を抽出した。橘文は中心飾の洋梨形の実が家紋の「橘紋」に似ていることから命名されたと思われるが、実の左右のY字形凸線や下の短いL字(一部Y字)形凸線が「橘紋」では説明できない(註1)。仮に中心飾の上のY字形凸線を花卉、下のL字形凸線を萼と呼称して分類した。軒棧瓦104(図19)のように、軒丸部はカキヤブリ(接合のための櫛描き)後に、別成形の軒丸部を後補している。型式分類は軒丸部によった。また注目されるものに一文字瓦がある。軒丸瓦・軒平瓦・軒棧瓦・鎌唐草・一文字瓦・菊丸瓦など范詰め成形の瓦類は、それぞれM・H・S・KK・I・KMの後、2桁数字とさらに細分できるものはABCDE…を付した。刻印は20種類が認められ、拓影を図23に示した。

軒丸瓦は丸瓦頂部の延長線上で断面を測るが、瓦当内区は巴頭の最高点と中心点を結ぶ線の延長で測った。ただし破片の場合はこの限りではない。巴の巻きは頭から尾の方向で示し、左軒棧瓦と左一文字瓦は棟から見た棧位置からの呼称法を採用した。しかし瓦当および地瓦(丸・平・棧瓦)の部位を指す時は、屋根に瓦を戻してやり、軒を見上げた時の左右・上下で示すことにした。ただし鬼瓦の目・耳・ヒレなどは鬼本位で記した。

軒丸瓦(図13-16、表2)は家紋・寺紋・神紋などの紋瓦をM01型式(2-11)、直径16.0cm以上の珠文16個の左巻き巴文をM02型式(12-19)、直径15.0cm前後の珠文13-16個の左巻き巴文をM03型式(20-22)、珠文13個か無珠文の右巻き巴文をM04型式(23-25)、直径13.0-14.5cmの珠文16個の左巻き巴文をM05型式(26-35)、同径の珠文12-15個の左巻き巴文をM06型式(36-53)、直径9.5-12.0cmの珠文10-16個の左巻き巴文をM07型式(54-60)、無珠文の左巻き巴文をM08型式(61-65)とした。巴文は65以外、三巴文である。

1は軒丸瓦の瓦范である。直径18.2cm、内区径12.0cm、高さ4.3cmで、中央に横から見た蓮華の蕾を配し、それを囲むように「神咒寺灌頂堂」の文字がタテに陰刻されている。母范になる原体を陽刻

し、それに粘土を詰めて内区を成形・焼成した。范頂に方形の釘穴がある。イブシをかけた瓦製である。2は龍紋で、3は左巻き藤巴紋、4は梅鉢紋、5は三本川のような紋で篆書体の一部かも知れない。6は小振りな黒餅紋で周縁部より文様が0.4cmほど突出し、7・8は蛇の目紋である。9は小振りな桔梗紋、10は篆書体で「本」字を、11は同じく篆書体で「椽」のような字を描く。巴文12は復元径22.5cmと巨大で、13も復元径20.0cmと大きい。14は文様の起伏が緩やかなのに対して、15・16は隆起して立体的である。17は隅巴で文様は16ほど隆起しない。34・35は古式でどちらも圏線内に短い巴文が配され、尾は圏線に接しない。34の方が文様は立体的である。45は下顎に唐草文をもつ隅巴、61も隅巴である。65は一巴文で、巴尾が一周半する。

軒平瓦(図17・18、表3)は豊臣期以来の文様系譜をH01型式(66~68)、滴水瓦をH02型式(69~71)、古式の橋文をH03型式(72~74)、中心飾の実が洋梨形をH04型式(75~81)、実が横に広がる柿形をH05型式(82~91)とした。67・68は中心飾が三葉系統で、68は凸縁で三葉の輪郭を表現する。69・70の中心飾は12弁の菊花と葉を配し、70の同范瓦には雨水を落すために下外縁部を溝状に切ったものがある。71は葉脈をもつ子葉が配されている。82は右側区に竹管によると思われる刻1の「○」印をもつ(図23)。83は二体構成の隅唐草で右側区に二体を留める釘穴をもち、85は左側区に竹管による刻2の「○」印が押捺されている(図23)。92は二体構成隅唐草の尻の破片で、拓本は裏(凸面)の凸帯で、拓本下辺の側面にスリアワセのためのケズリ調整が見られる。

軒棧瓦(図19、表4)は軒丸部の文様で分類した。S01~04・S06型式は左巻き三巴文である。珠文16個をS01型式(93~95)、珠文12~13個をS02型式(96~102)、珠文9~11個をS03型式(103~107)、無珠文をS04型式(108~110)とし、蛇の目文をS05型式(111~114)、左軒棧瓦をS06型式(115)、軒丸部が巴文以外のものをS07型式(122)とした。93の軒丸部はM05C型式である。103・104の軒平部は同型式である。112は右側区に刻9の「利右衛門」の刻印があり、その右側は隣の瓦の軒丸部とのスリアワセのため、斜めに面取りしている。122は沈線で十字を6個書いている。カケ(肩)を持つ軒棧瓦をとくに鎌唐草とした。KK01型式(116)は橋文だが、左鎌唐草のKK02型式(117)は無文である。

一文字瓦(図20、表4)は軒丸部が蛇の目文で他は無文のI01型式(118~121)、カケをもち無文のI02型式(123)、軒平部が唐草文様のI03型式(124)がある。右端を含む無文の破片をI04型式(125)とした。

菊丸瓦(図21、表5)はKM01~10型式(126~135)があり、126・127は16弁の二重菊、他は8弁である。

飾瓦136は刺菊文を配した円形飾瓦で瓦范1と断面形は似るが、文様が陽刻で薄く小さいため棟飾と考えた。137は樹木のヒダを表現し、裏面も丁寧にナデているため留蓋の象形の可能性がある。146(図22)は梅の木を表現した方形棟飾で、147は半球形の粘土鉢外面に桐葉文をあしらった留蓋である。

面戸瓦(図21、表5)138は蟹面戸、139は蟹面戸で、当地から出土したすべての蟹面戸瓦と一部の蟹面戸の裏面に、葺土に差込むツマミ状突起がある。140は鳥衾と雁振瓦を連結するための繋ぎの瓦と思われ、谷間瓦の大劔141は瓦当(垂れ)の下辺を緩やかなカーブを描くように挟っている。塼142は5個の孔とその中心にも1個を穿った小製品である。雁振瓦143は粘土板を原体に巻き断面五角形に成形後、内側の粘土をヘラで削り取っている。玉縁の付根に斜め方向の貫通しない釘穴がある。不明瓦質製品144は断面L字形の粘土板が掘りゴタツ状に四周を囲む形態で、最近大板城跡で出土が相

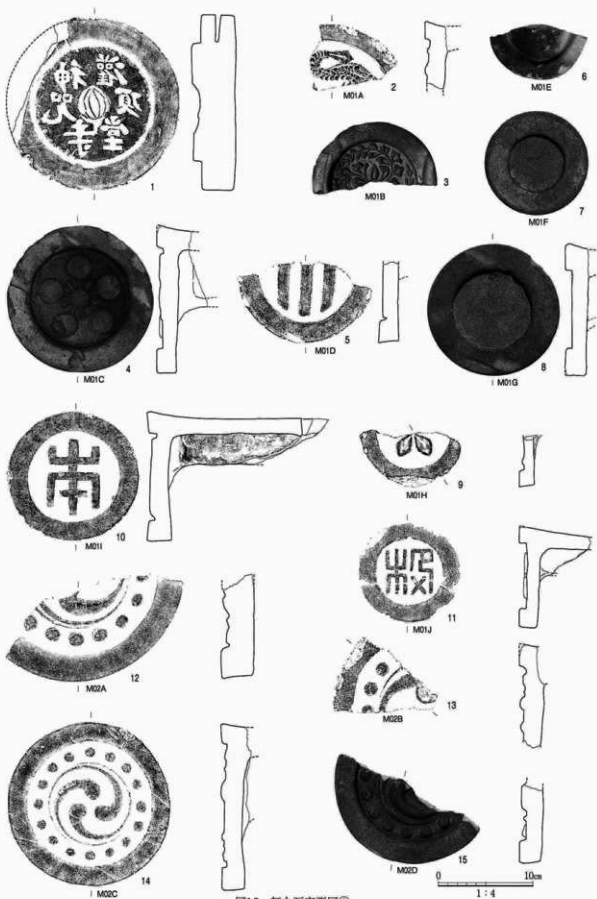


図13 軒九瓦実測図①

SK01(6・8)、SK02(14)、SK03(13)、SK06(4・10)、SK45(5)、
SK69(9)、SK70(2・7・11・15)、SK82(1・3)、その他(12)

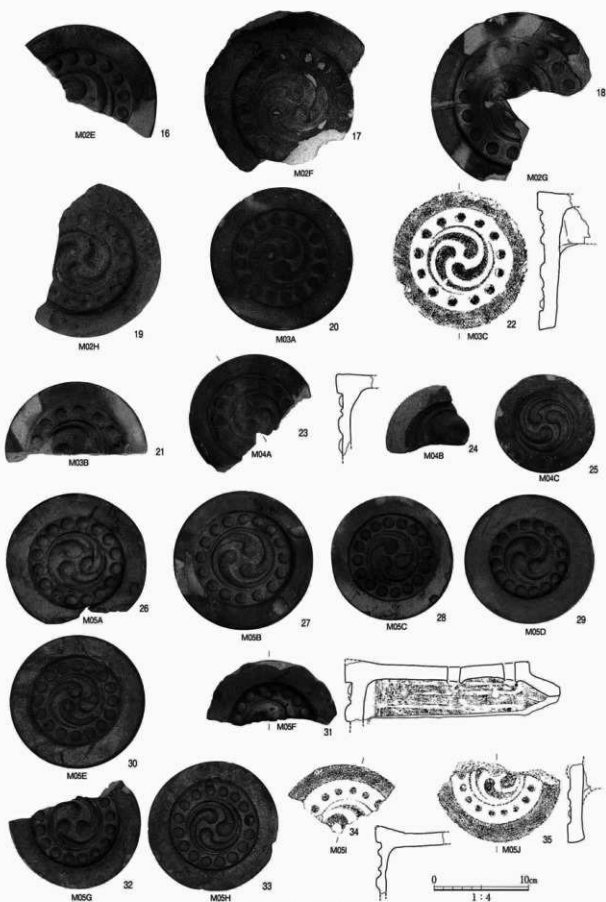


図14 軒丸瓦実測図②

第3層：崩壊物層(35) SK01(29)、SK03(22)、SK06(31・33)、SK45(32)、SK69(17・25)、SE60・SK61(21)、SK70(23・24)、SK72(18)、SK82(19・20・27・28・30)、攪乱その他(16・26・34)

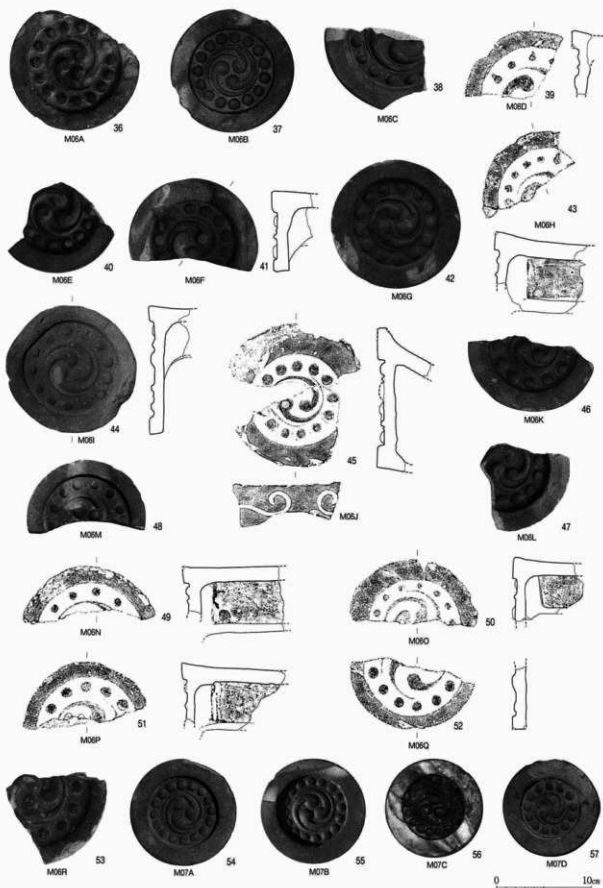


図15 軒瓦実測図③

SK01(36・54)、SK02(40・49)、SK03(43・48)、SK39(37)、SK45(52)、SK55・56(46)、SE60(51)、SK69(57)、SK70(39*・41・44・50)、SK77(45)、SK82(38・42・47・53・55)、SK86(56) *印は当該遺構出土の可能性の高いもの

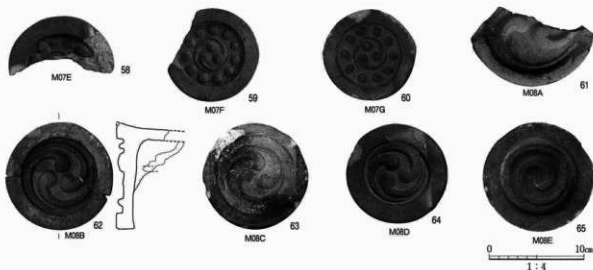


図16 軒九瓦実測図④

SK02(58)、SK06(59・62)、SK33(61)、SK44(65)、SK45(63)、SK82(60・64)

表2 軒九瓦出土遺構一覧

瓦式番号	遺構番号	部材	SK01	SK02	SK06	SK08	SK09	SK15	SK17	SK29	SK33	SK39	SK40	SK55	SK56	SK44	SK45	SK46	SK70	SK82	SK86	現代布瓦その他	合計
瓦型	1	神宮寺遺跡出土 字紋																					1
M01A	2	無紋																	1				1
M01B	3	字紋(龍馬巴紋)																		1			1
M01C	4	無紋																					1
M01D	5	三本山																					1
M01E	6	雲紋																					1
M01F	7	龍の目紋(小)		1																1			1
M01G	8	龍の目紋(大)		1																2			3
M01H	9	雲紋																					1
M01I	10	三本山																					1
M01J	11	龍の目紋(小)																					1
M02A	12	龍文(雲)																					1
M02B	13	龍文(雲)																					1
M02C	14	龍文(雲)																					1
M02D	15	龍文(雲)																					1
M02E	16	龍文(雲)																					1
M02F	17	龍文(雲)																					1
M02G	18	龍文(雲)																					1
M02H	19	龍文(雲)																					1
M02A	20	龍文(雲)																					1
M02B	21	龍文(雲)																					1
M02C	22	龍文(雲)																					1
M02D	23	石巻文、龍文(雲)																					1
M02E	24	石巻文、龍文(雲)																					1
M02F	25	石巻文、龍文(雲)																					1
M02G	26	龍文(雲)																					1
M02H	27	龍文(雲)																					1
M02I	28	龍文(雲)																					1
M02J	29	龍文(雲)																					1
M02K	30	龍文(雲)																					1
M02L	31	龍文(雲)																					1
M02M	32	龍文(雲)																					1
M02N	33	龍文(雲)																					1
M02O	34	龍文(雲)																					1
M02P	35	龍文(雲)																					1
M02Q	36	龍文(雲)																					1
M02R	37	龍文(雲)																					1
M02S	38	龍文(雲)																					1
M02T	39	龍文(雲)																					1
M02U	40	龍文(雲)																					1
M02V	41	龍文(雲)																					1
M02W	42	龍文(雲)																					1
M02X	43	龍文(雲)																					1
M02Y	44	龍文(雲)																					1
M02Z	45	龍文(雲)																					1
M02A	46	龍文(雲)																					1
M02B	47	龍文(雲)																					1
M02C	48	龍文(雲)																					1
M02D	49	龍文(雲)																					1
M02E	50	龍文(雲)																					1
M02F	51	龍文(雲)																					1
M02G	52	龍文(雲)																					1
M02H	53	龍文(雲)																					1
M02I	54	龍文(雲)																					1
M02J	55	龍文(雲)																					1
M02K	56	龍文(雲)																					1
M02L	57	龍文(雲)																					1
M02M	58	龍文(雲)																					1
M02N	59	龍文(雲)																					1
M02O	60	龍文(雲)																					1
M02P	61	龍文(雲)																					1
M02Q	62	龍文(雲)																					1
M02R	63	龍文(雲)																					1
M02S	64	龍文(雲)																					1
M02T	65	龍文(雲)																					1

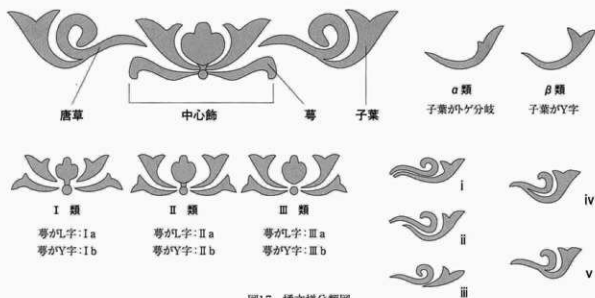


図17 挿文様分類図

表3 軒平瓦出土遺構一覧

中心部 または 形式番号	遺構 または 調査位置	SK01	SK02	SK06	SK17	SK38	SK45	SK70	SK82	SK86	現代 瓦戸	その他	合 計	備 考
H01A	66											1	1	
H01B	67		1										1	
H01C	68					1							1	
H02A	69	1											1	
H02B	70							1				1	2	
H02C	71								1			1	1	
I a	a Ⅱ									1			1	
I a	a Ⅲ	1											1	
I a	a v		2									1	2	含 H04B (SK02)
I a	β i							2		2			4	含 H05D (SK06)
I a	β Ⅱ					1			1				2	含 H04D (SK02)
I a	β Ⅲ							1	3				4	含 H05G (SK70)
I a	β v							1	1				2	
I b	a Ⅳ								1				1	
I b	a v				1								1	
I b	β i			1									1	含 H05E (SK06)
I b	β Ⅱ					1			1				1	
Ⅱ a	a i								1				1	
Ⅱ a	a v						1						1	H04C
Ⅱ a	β i	1						3	2	1			7	含 H05G (SK70)
Ⅱ a	β Ⅱ									1			1	
Ⅱ a	β Ⅲ	1		3					8	1		1	14	含 H05I (SK06)
Ⅱ a	β v							2	3				5	
Ⅱ b	a Ⅱ								1				1	
Ⅱ b	a Ⅲ							1					1	
Ⅱ b	a v								1				1	
Ⅱ b	β Ⅲ					1							1	H03A
Ⅱ b	β Ⅳ								2	1			3	
Ⅱ b	β v	1	2	1				1					5	含 H04E (SK01) - H05H (SK02)
Ⅲ a	a i											1	1	H05F (SK77)
Ⅲ a	β Ⅱ							1					1	H04G
Ⅲ a	β v								1				1	H05B (調音車)
Ⅲ b	a Ⅳ							1	1				2	含 H04A (SK70)
Ⅲ				1									1	
Ⅲ	a v			1									1	
Ⅲ	β i			1				3	4				8	含 H05A (SK02)
Ⅲ	β Ⅱ											1	1	
Ⅲ	β Ⅲ		1	1				2	4				8	
Ⅲ	β v							3	1				4	
Ⅲ	β i		1						2				3	
Ⅲ	β Ⅲ										1		1	
Ⅲ	β v		1										1	
Ⅲ	a i								1				1	
Ⅲ	a Ⅱ							1					1	
Ⅲ	β	2							3				5	
Ⅲ	β i							1					1	H04F
Ⅲ	β Ⅱ							2	3				4	
Ⅲ	β Ⅲ			1				1	1				3	含 H03B (SK06) - H03C (SK02) - H05C (SK70)
Ⅲ	β Ⅳ								5				5	
Ⅲ	β v							1	2				3	
調音車	92								1				1	二体構成

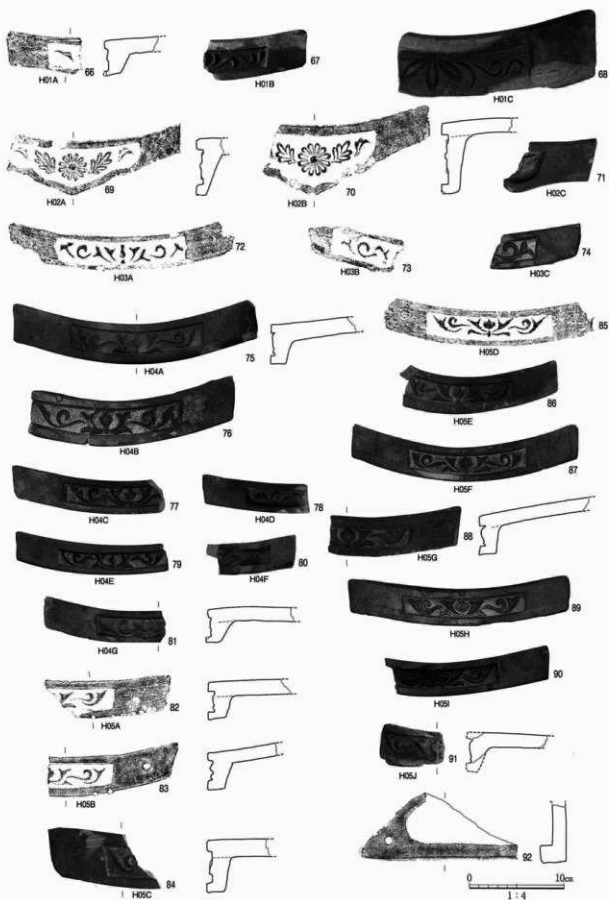


图18 軒平瓦·隋唐草突面圖

第3層：崩塌物層(66)、SK01(69·79)、SK02(67·76·89)、SK06(73·86·90)、SK45(68·72·77)、SK70(70·75·80·81·84·88·91)、SK77(71·87)、SK82(74·78·82·83·92)、SK86(85)

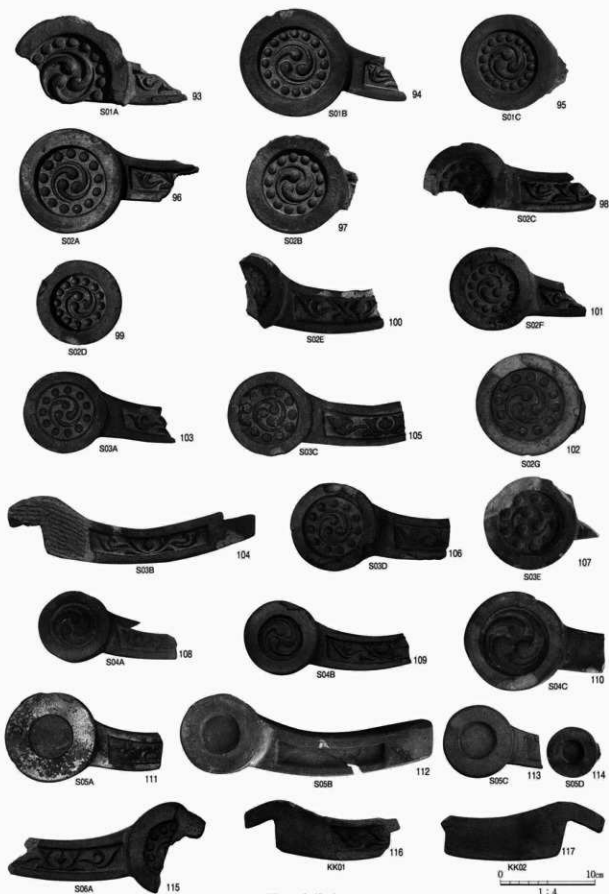


图19 軒棧瓦

SK01(96·105)、SK02(93·98·114)、SK06(109·111)、SE60·SK61(108)、SK69(112)、
SK70(101)、SK82(94·95·97·99·100·102~104·106·107·113·115~117)、西区搅乱(110)

次いでいる[大阪市文化財協会2009a p.46]。埴145は断面カマボコ形で、凸面に粗い櫛による条線が引かれる。148～156は鬼瓦(図22、表5)の破片で、149はハリカワ仕立てで「九」を伴う家紋である。

また、丸瓦の表(凸)面にベンガラを塗布した破片1点がSK06から出土したが、他に例がない。

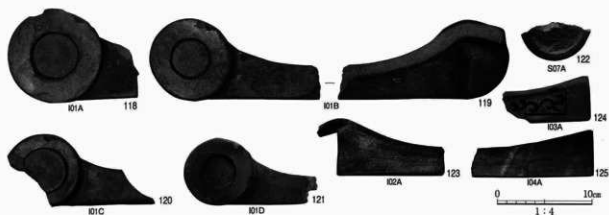


図20 一文字瓦

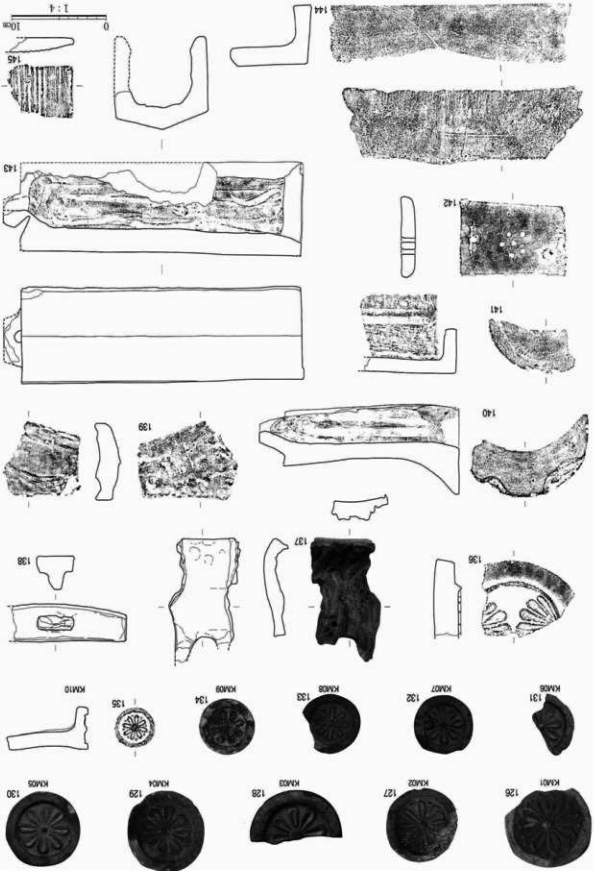
SK01(123)、SK06(120・125)、SK82(118・119・121・122・124)

表4 軒棧瓦・一文字瓦出土遺構一覧

型式番号	報告書番号	珠文数	中心部	唐草	SK01	SK02	SK06	SK69	SK70	SK82	SK86	その他	合計	備考
S01A	93	16	b	β iv		1							1	
S01B	94	16	a	β ii						1			1	
S01C	95	16					1			1			2	写真はSK82
S02A	96	13	b	β iv	1								1	
S02B	97	13								1			1	
S02C	98	13	ii b	β iv		1				4	1	1	7	写真はSK02
S02D	99	13								1			1	
S02E	100	13	i b	β ii			1			2			3	写真はSK82
S02F	101	13	a	β iv					1	4				写真はSK70
S02G	102	12								1			1	
S03A	103	11	a	β iv						1			1	
S03B	104	x	ii a	β iv						1			1	
S03C	105	11	ii b	β v	1								1	
S03D	106	11	a	α iv						2			2	
S03E	107	9								1			1	
S04A	108	0	a	α v						1		1	2	写真はSE60
S04B	109	0	ii a	β v			1						1	
S04C	110	0										1	1	写真は西宮幾乱
S05A	111						1			1			2	写真はSK06
S05B	112				1			2	1	6			10	写真はSK69
S05C	113									1			1	
S05D	114				1					1			1	
S06A	115	13	i b	α ii						1			1	
S07A	122									1			1	
KK001	116		ii a	β iv						2			2	
KK002	117									1			1	
IO1A	118									1			1	
IO1B	119				1		1		2	3		1	8	写真はSK82
IO1C	120						1						1	
IO1D	121									1			1	
IO2A	123				1								1	
IO3A	124									1			1	
IO4A	125						1					1	2	写真はSK06
			i a	α iv	1								1	
			i a	β iv						3			3	
			ii a	β ii						1			1	
			a	α iv						1			1	
			a	β iv							1		1	
			b	β ii						1			1	
				α iv	1								1	
				β i						1			1	
				β						1			1	

SK82(130・132・135・136)、SK86(128・138・141)、第1層：近代包各層(145)。印は当該遺構出土の可能性の低いもの

図21 第九瓦・その他の瓦実測図



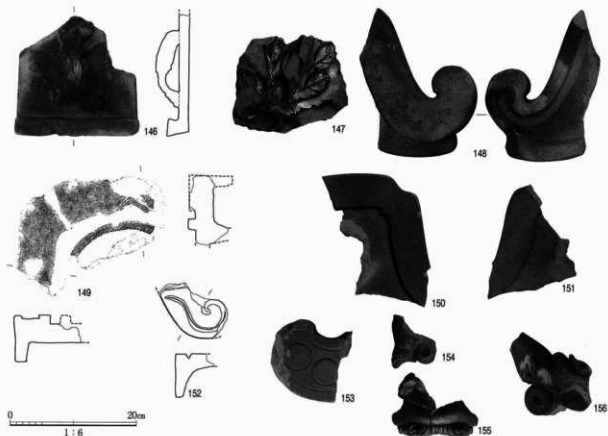


図22 鬼瓦・飾瓦・留蓋実測図

SK01(146・148・154・155)、SK03(150・151)、SK06(149)、
SE60・SK61(153)、SK70(152)、SK82(147)、その他(156)

表5 菊丸瓦・鬼瓦ほか出土遺構一覧

型式番号	報告書 番号	SK01	SK03	SK06	SK15	SK31	SK35	SK38	SK45	SK55・ 56	SK69	SK70	SK82	SK86	その他	合計	備考
KM01	126														1	1	SE60・SK61
KM02	127							1								1	
KM03	128					1								1		2	
KM04	129	1													3	4	写真12 SK01
KM05	130												1		3	4	写真12 SK82
KM06	131				1								1		1	3	写真12 SE60・SK61
KM07	132	1										1	1			3	写真12 SK82
KM08	133								1	1						2	写真12 SK55・56
KM09	134							1									
KM10	135															1	
飾瓦	136													1		1	
飾瓦	137											1				1	
側面戸瓦	138	3											4	1		8	図12 SK86
側面戸瓦	139									1	1					2	図12 SK55・56*
鳥倉繋ぎ瓦	140				1											1	
大軒(谷間瓦)	141											1		1		2	図12 SK86
塀	142	1														1	
横振瓦	143									1						1	SK55・56*
不明瓦	144	1														1	
不明瓦	145														1	1	第1層(近代)
梅本文飾瓦	146	1														1	
樹葉文留蓋	147												1			1	
鬼瓦左ヒレ	148	1														1	
鬼瓦右肩	149				1											1	
鬼瓦左肩	150			1												1	
鬼瓦右肩	151			1												1	
鬼瓦左ヒレ	152											1				1	
鬼瓦右ヒレ	153													1	1	1	SE60・SK61
鬼瓦右目	154	1														1	
鬼瓦アゴ	155	1														1	
鬼瓦右目	156														1	1	東区東横溝

「備考」の*印は当該遺構出土の可能性の高いもの

瓦の刻印には、①直径0.6～1.6cmの印鑑状、②全長2.5～3.5cmの長方形枠の有無はあるが人名のみ、③全長3.5～5.1cmの長方形枠内に地名・人名、④大判の職種を示すものがある(図23)。押捺箇所は、④を除いて平瓦・棧瓦・軒平瓦では、狭端面・下端面・瓦当面など屋根に上げた時に見える部位である。しかし丸瓦においては玉縁付根の隠れる部位であることから、捺印は可視の効果を狙ったものではなく、単に瓦に成形した粘土板を立てて乾燥させる段階で押捺したことによる結果と考えられる。判型の向きも刻19はほぼ統一されているが、無頓着なものも多いことが表6から見て取れる。これらの刻印瓦は表面のミガキや端面の面取りが丁寧であり、上等品として生産されたことが窺える。

2) 瓦生産関連資料

瓦を焼成する際の窯道具の一種と考えられるものに支脚型の瓦質製品がある。出土した総個体数は71個で、高さは2.5～9.2cmと差異が大きい。出土遺構はSK01・02・03・06・13・14・46・70・82であり、ほかに西区の遺構精査中などで見つかった。時期は18世紀後半～19世紀前半にあたる。このうち、東区のSK70が最も多く36個、その南側にあるSK82が17個で、大半が東区東端付近の土壌に集中していた。以下に、そのおもなも



写真2 支脚型瓦窯道具

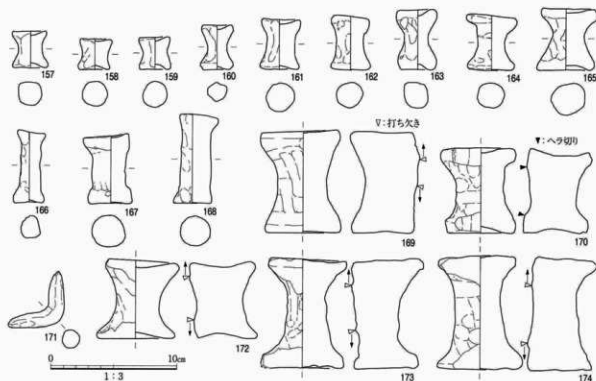


図24 支脚型瓦窯道具実測図

SK01(160・161・163・171)、SK02(165)、SK03(166)、SK06(167)、SK13(168)、SK70(157～159・162・169・170・172～174)、SK82(164)

のを示した。

157～168は小型ないし細身で、後述する169・170・172～174の大型品と区別できる。手づくねで成形し、表面はユビナデの粗雑な作り方である。164のように上下の円盤部が平坦なものもあるが、163をはじめ明瞭な凹面に仕上げるものが多い。166～168は柱部が直線状で細身である。これらは窯の中で焼成前の瓦や瓦質製品などを載せるために使われたと考えられる。

一方、169・170・172～174は高さ6.0cm、幅5.0cm以上で、後述の大型品に属する。表面の調整は小型品と同じだが、上下の円盤部はおおむね平坦なものが多い。170を除き、他は上下の円盤部の一方を打欠いている。その破面は、本来の表面と同様にイブシがかかっており、意図的に打欠いた後、再び瓦と同じ窯の中で焼成されたものであろう。170は製作時点で一方をヘラで切落としていた。こうしたことから、大型品には成形時から一方を切落とすものと、当初は完全な形で使用し、途中で必要に応じて該当部分を打欠いて使うものがあると考えられる。図化していないものも含め、27点の大型品のうち打欠いたものが23点、ヘラ切りしたものが3点あり、ほとんどがこうした特徴をもっている。

大きさの傾向を遺構別にグラフ化すると、図25のようになる。上記のとおり、おおむね高さ6cm、幅5cm以上のものが大型品、それ以外を小型品に大別できる。遺構によって出土するサイズに傾向があり、一括して廃棄される前の使用状況が反映されているものと考えられる。

支脚型瓦質製品の大型品については、類似の窯道具を近年まで窯詰に使用していた例がある(註2)。

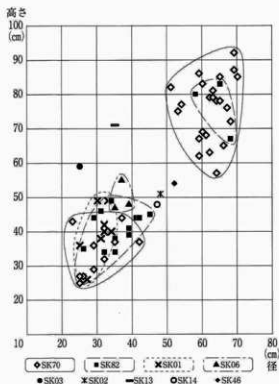


図25 遺構別の窯道具の大きさ

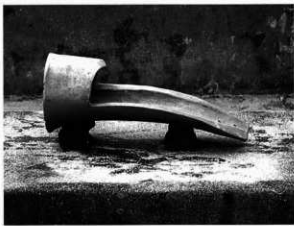
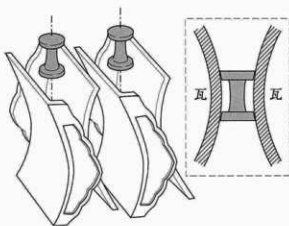


図26 窯道具の使用方法

瓦や各種製品がお互いや床と接触すると、表面にイブシのむらができるので、接着面は小さく、かつできるだけ多量に納まるよう工夫するために使用するという。例えば軒平瓦や滴水瓦を竈詰する場合に、図26-左のように使い、また、隅巴瓦など反りのある筒部が長い瓦には、竈床に接地しないよう横向きにして間にかませる(同一右)。本調査地例のように、初めから円盤部をヘラ切りしたものや後で打欠いたものは、このような横向きの使用方法をとるためと推定される。また、このような竈道具は作業の合間を利用して粘土でごく簡便に作るものであった点も一致する特徴である。



写真3 焼け歪んだ瓦(SK82出土)

ほか、瓦生産を示す資料に、SK08・70・82から出土した焼け歪んで軸着した平瓦片がある(写真3)。

3)用途不明瓦質製品・道具類

用途不明の瓦質製品が多種出土した(図27・28)。何らかの部品や道具などと考えられるものもあるが、その用途を確定するには至らなかった。

175は中実の宝珠形に作られている。胴部は敲打痕とみられる細かい凹凸が無数に見られ、軸はケズリで整形し、宝珠との接合部の仕上げも粗雑である。SK06から出土した。

176は先端が平坦となる頂部から円盤部の中心へ直径0.7cmの孔が穿たれている。東区の現代井戸から出土した。

177は胴部の両側に細い孔を垂直に穿った耳をつけた小壺である。頸部から口縁部は欠損している。ただし器壁は厚く、内面の仕上げは粗雑である。SP71から出土した。

178は直径5.3cm、高さ6.7cmで、円盤部から5個の孔が長軸に沿って穿たれている。表面の仕上げは粗雑である。通気を意図した何らかの部品であろうか。SK38から出土した。

179は方形の盤状となるが、直交する側面の一方は、上下縁が緩く下へ湾曲し、同様に底も水平ではないため容器ではない可能性もある。先端が削れているが、底部外面の角が低い脚状に突出しているため、そこを下に向けた容器と想定しておく。SK70から出土した。

180は長径10.0cmの小型の鬼面である。厚さ1.5cm程の粘土板に鬼面が陽刻されている。眉・眼・歯などは刃物で刻み、表現している。全体に立体的な容貌であり、表面はナデで仕上げられているが、型による成形がもともと思われる。裏面は中央がやや凹み、その周囲は平坦であるが、何かに装着する細工はなく、その痕跡も認められない。SK01から出土した。

181～183は瓦質十能というべき道具類である。181はSK70、182はSK45、183はSK07から出土した。

184～186は大型の瓦質製品の一部と思われるものである。184は全体の形状は不明だが、表面に細かい刺突模様を隙間なく施している。SK82から出土した。185は厚さ1.7cmの板状の瓦に、径1.3cm程の孔をあけているが、裏面まで抜けていないものも多い。186は現存長25.4cmで、中空の角状となる。

内面は円滑で、下部が開くため何らかの容器である可能性も考えられる。SK69から出土した。

187・188は直角に曲がる刃物を粘土板に当て、「凸」字形に押し切って作られたもので、188には粘土板どうしが切り離されず、最後に折り取った跡が側面に残っている。189は表面が比較的丁寧にサデられているため、飾り瓦の一部かもしれない。190は粘土板を切って弧を描く帯状に成形し、その上に断面が三角形の粘土を貼付けている。五徳のような台となるものと考えられ、瓦窯道具の一種とも考えられる。187はSK01、188・189はSK70、190はSK82から出土した。

191は粘土板の端付近に涙滴状の孔をあけ、表面に粘土がはがれた痕跡がある。孔の形状から壁掛

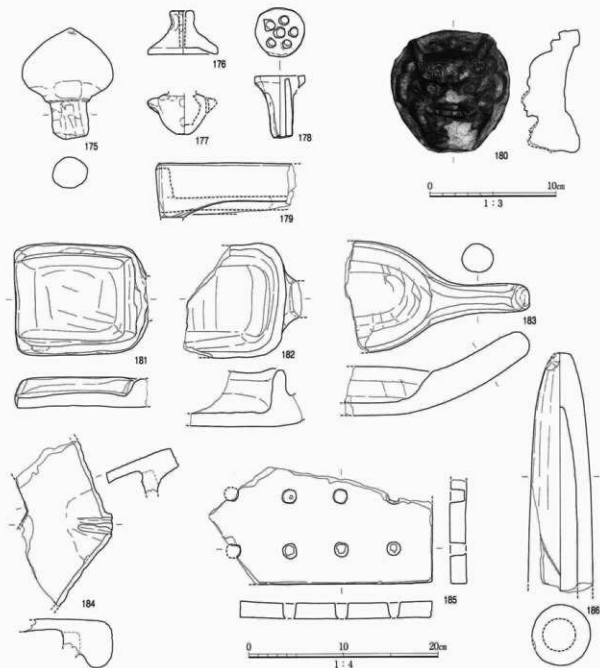


図27 用途不明瓦質製品実測図①

SK01(180)、SK06(175)、SK07(183)、SK38(178)、SK45(182)、SK69(186)、SK70(179・181)、SP71(177)、SK82(184)、現代井戸(176)、遺構精査中(185)

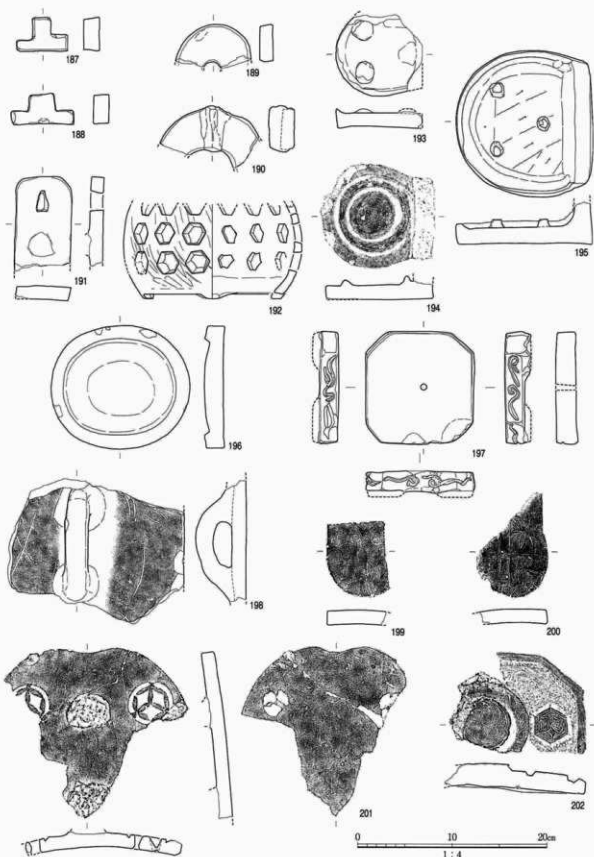


图28 用途不明瓦質製品実測图②

SK01(187)、SK02(194)、SK17(192)、SK26(196)、SK30(201)、SK38(197)、SK45(195)、
SK70(188·189·191·193·202)、SK82(190·198)、第1層：近代包含層(199·200)

けの際に用いられる釘孔が想像されるが、確証はない。194・195は円または半円の粘土板に円弧状の粘土紐または3点の粘土目で支持台をつくるが、粘土板の一端は直角に曲がって垂直面をなす。193は同じく半円形の粘土板に低い3点の粘土目で支持台を作るが垂直面はない。191・193はSK70、194はSK02から出土した。

192は厚さ0.7～1.0cmで、外面はナデで仕上げられ、六角形のスタンプによる割付の後、刀子などで切り抜いてスカシ孔を並べている。下端には4箇所 of 低い脚が付く。SK17から出土した。

196は小判形の皿状となる製品で、表面はナデを施して滑らかに仕上げられている。碗のように中央が高くなっているが、擦痕はない。裏面はやや粗雑な仕上がりである。SK26から出土した。

197は隅切りの方形で、四隅に短い脚台が付く台状の製品である。側縁にはヘラなどの先端で唐草を描くが稚拙である。中央の小孔に心棒を刺して使う台座と考えられる。SK38から出土した。

198は図の左右方向にやや湾曲し、表面に把手が付けられている。把手の周囲には線刻があるが、描いた内容は不詳である。SK82から出土した。

199・200は全体の形状が不明だが、下に向って小判状に突出する粘土板で、表面を丁寧に磨いた後、199は松とその左右に竹葉を、200は竹を線刻している。一連の製品と思われるが、松の方が表現が稚拙であり、線も細い。工具が描き手が異なると思われる。ほかに201・202にも竹・竹葉の表現がある。201は図の左右方向にやや湾曲した板状の製品で、外縁は上端がやや内湾している。全面が丁寧に磨かれている。外面中央に剥離痕があり、198と同様の把手が付いていたのであろう。把手の左右に3葉3組の竹葉を円弧で囲み内側をスカシ孔とした文があり、刃物の先端を使い、家紋として描かれたものであろう。さらに、裏面に稚拙であるが、線刻により竹が描かれている。202も図の左右方向にやや湾曲しており、表面は丁寧に磨かれている。中央に三つ巴とそれを囲む火焔様の文様を線刻している。火炎太鼓をモチーフとしていることも考えられる。その右に201と同じ3葉3組の竹葉を刃物の先端などで細かく刻みながら描き、周囲を直線状の刃物を押し当てた線で六角形に囲っている。201と同じ家紋であろう。外縁との間は細かい刺突模様で埋めるが184よりは粗い。199・200は東区南部の第1層、201はSK30、202はSK70から出土した。

4) 陶磁器・土器類

先にふれたとおり、見つかった遺構は17世紀末～19世紀前半の遺物を包含する。ここでは、各種の製造業に係わる特徴的な資料が出土した遺構から、おもな陶磁器・土器を選んで報告する。

SK01 肥前磁器は碗・皿・蓋・鉢・小杯がある。染付碗は203～208で、203の底部内面は蛇の目釉刺し五弁花を押し内外面にアルミナの付着がある。208は筒型碗で、高台内には二重方形枠内に「簡江」の銘、底部内面に五弁花を描く。207は広東碗で、209・210は青磁染付碗である。皿は染付の211と輪花皿212で、212は内外面に丁寧な絵を密に描く。口縁に鉄を塗り、高台内にはカンナ目が残る。肥前以外の産地の可能性がある。碗の蓋は213～215で214は青磁染付である。215はつまみ内に「大明〇〇年製」を書く。鉢216は青磁染付である。小杯217は外面に朱色を塗り、内面は朱と金彩で絵を描く。肥前陶器は刷毛目碗218と呉器手碗219である。京・信楽系陶器では灯明受皿220がある。瀬戸美濃焼



图29 陶磁器・土器実測图①
SK01(203~225)、SK08(226~229)

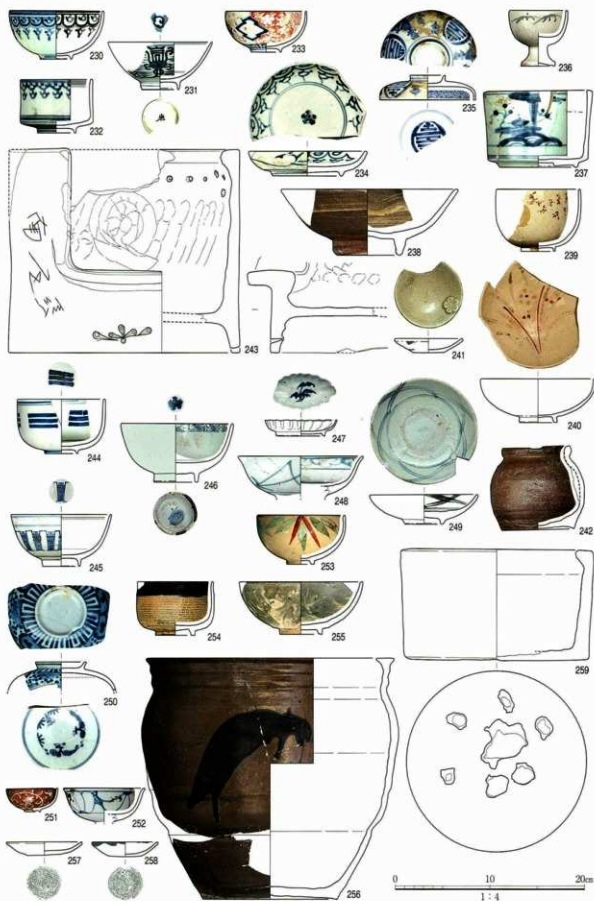


图30 陶磁器・土器実測图②
SK02(230~243)、SK06(244~259)



图31 陶磁器·土器実測図③

SK23(260~263)、SK35(264~271)、SK38(272~277)、SK39(278~283)、SK70(284~294)

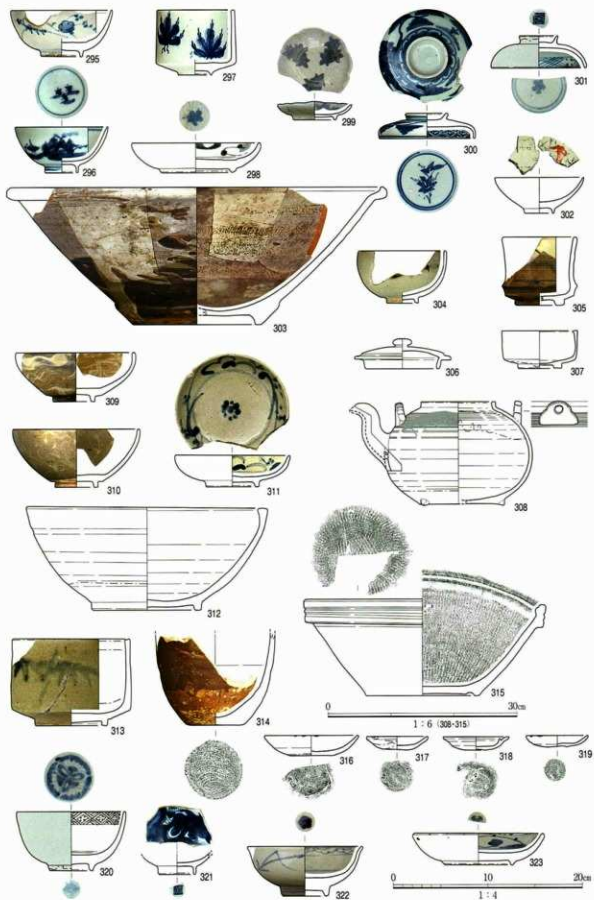


图32 陶磁器·土器実測図④
SK82(295~319), SK86(320~323)

陶器は刷毛目碗221・染付陶器の皿222と掛け分け仏花瓶223、肩に呉須で唐草を描く徳利224がある。備前焼水滴225は上面に唐獅子と牡丹が浮き出ている。上下別々に型で作って合わせている。

SK02 肥前磁器は碗・皿・蓋・香炉・仏飯器がある。碗は染付230～232と、色絵233がある。231は高台内に銘がある。染付皿234は底部内面に五弁花を押し、235は染付の蓋である。236は染付仏飯器である。237は染付香炉で蛇の目凹型高台である。肥前陶器は刷毛目鉢238で、底部に重ね焼きの痕跡があり、高台は高く、端部とその周辺に泥漿状のアルミナ砂を塗っている[大橋康二1995]。京・信楽系陶器は碗と灯明皿がある。239・240は色絵碗で、239は赤絵の具と金彩が少し残る。240は京都公家町の報告によく似た例がある(註3)[京都国立博物館2006]。灯明皿241は小型で、口縁部内面に花の付文と4本の櫛目を交差させて付けている(註4)[畑中英二2006]。丹波焼の片口壺242は体部外面に土部を塗り、底部は鉄分がこびりついている。内面は鉄錆が付着し鉄紫壺として使用されたと考えられる。土師器焼畑243は外面を赤く塗り、「南瓦屋町」の線刻がある。

SK06 肥前磁器は碗・皿・蓋・小杯・仏飯器がある。244は染付碗で、245は小広東碗である。246は青磁染付碗で、底部内面に五弁花を押し、高台内に「福」字を書く。247は小型変形皿で248は染付皿である。染付皿249は蛇の目軸刺し砂が付着する。250は染付碗の蓋で、色絵小杯251と仏飯器252がある。京・信楽系陶器253は赤と緑で竹と笹を描く色絵碗である。瀬戸美濃焼陶器の碗254は鍍碗、255は刷毛目碗である(註5)。丹波焼の甕256は内外面に鉄軸を掛け、上から飾りの軸が垂れている。土師器皿は直径7.8cmの257と、直径7cmの灯明皿258がある。共に底部外面に糸切り痕が残る。瓦質鉢259は口縁が内側に肥厚し、底に焼成後にあけた大きさも配置もまばらな孔が7箇所ある。底部内面の壁際には何かが当たった痕跡があり、五徳が置かれていたようにも見える。内外面とも火を受けたのか器壁が荒れている。

SK08 肥前磁器は染付皿226で底部内面を蛇の目軸刺し、アルミナを塗っている。青磁染付碗の蓋228は内面に五弁花・口縁部付近に四方櫛文、つまみ内に二重方形枠に「福」の字がある。蓋物の蓋227は色絵である。京・信楽系陶器の半筒碗229が相伴している。

SK23 肥前磁器は染付の碗260・蛇の目軸刺した皿261と蓋262がある。瀬戸美濃焼陶器263は染付碗で、外面に呉須で花の絵を描き、高台付近を除き灰釉を掛けている。

SK35 肥前磁器は碗・皿・瓶・香炉がある。染付碗264の文様は雨降り文で、濃筆だけで塗った鋸歯状の文様で、雨粒の表現は無い[大橋康二・西田宏子1988 p.45]。碗265の器壁は薄い。皿266は余白を多く取った内面文様である。瓶267は甕型で文様は竹である(註6)[近世九州陶磁学会2000]。青磁香炉268は内面露胎で、口縁端部を中に折り込んでいる。肥前京焼風陶器平碗269は底部内面に呉須による絵が描かれる。この土壌から出土した土師器皿にロクロ成形のものはない。270は皿、271は灯明皿である。

SK38 肥前染付磁器は碗272と、底部内面を蛇の目軸刺した染付皿273と香合274である。肥前陶器は刷毛目碗275で、瀬戸美濃焼陶器は糞水入れ276である。土師器は手づくねの灯明皿277がある。

SK39 肥前磁器は小杯278である。京・信楽系陶器は鍋の蓋279・280で共にトビガンナにイッチンを飾る。281は土瓶の蓋である。瀬戸美濃焼磁器282・283は端反碗である。

SK70 肥前磁器は碗・皿・蓋・鉢である。染付碗284は底部内面に五弁花を描く。285は朝顔型碗である。286は青磁染付碗で、高台内に二重枠線の中に「福」の字を入れる。筒型碗287は底部内面に五弁花を描く。輪花皿288は蛇の目凹型高台内に「成化年製」を書く。染付289は朝顔型碗の蓋である。鉢290は底部内面に五弁花を押し高台内は渦「福」を書く。漆継ぎの痕跡がある。瀬戸美濃焼は陶器と磁器がある。陶器の蓋291は鉄軸と呉須で交互に線を引く文様の麦葉手である〔瀬戸市史編纂委員会1998〕。褐釉の磁器の瓶292は胎土がねっとりした均質なもので、全形は不明である。信楽焼の甕293は口縁部が「丁」字状で頸部がやや長い。産地不明の鉢294は口縁部が内側に肥厚し、器壁は薄い。内面にのみ灰釉を掛け、他は露胎である。底部外面に4箇所砂の目跡があり、底部内面には3箇所のピン跡が認められる。

SK82 肥前磁器は碗・皿・蓋・小杯がある。染付碗295は内底面に蛇の目軸刺し高台にアルミナが付着する。296は薄手で、筒型碗297は口縁部が厚く鉢の可能性もある。298は底部内面に蛇の目軸刺し五弁花を押し、高台端部に砂かアルミナが付着する。299は小型輪花皿である。300は染付碗の蓋・301は青磁染付碗の蓋で、301はつまみ内に渦「福」、内面に五弁花を押し。色絵小杯302は表面に細かいピンホールがあり、肥前以外の産地の可能性もある。肥前陶器は三島手の鉢303がある。京・信楽系陶器は碗・蓋・蓋付鉢・土瓶がある。碗304は鉄絵がある。筒型碗305は体部の外面下半に刷毛で鉄を主体とした釉薬を塗り、その上から鳥のような文様を張り付けた特徴的な碗である〔京都市埋蔵文化財研究所2004〕（註7）。306は灰釉の土瓶の蓋で、蓋付鉢307は露胎の扁平な口縁部以外に透明釉を掛ける。鉄釉土瓶308は肩に数条の条線を飾り、一部に鉛釉を流し掛ける。瀬戸美濃焼陶器は碗・皿・鉢・香炉・甕がある。309・310は刷毛目碗である。皿311は底部内面に花、体部に唐草を呉須で描く。鉢312は鉄軸を掛ける。香炉313は体部外面の1箇所に呉須で笹の絵を描き、内面は主に露胎である〔瀬戸市史編纂委員会1998〕。314は錢甕で内面と外面の上半に鉄軸を掛ける。下半は露胎である。堺描鉢315は胎土に糠を多く含む。軟質施釉陶器は大316・小317の灯明皿と灯明受皿318がある。土師器皿は319で灯明皿である。これらは底部外面に糸切り痕がある。

SK86 肥前磁器は碗と皿で、染付碗322は蛇の目軸刺しアルミナが付着する。321は底部内面に濃い呉須で密に絵があり、高台内に銘がある。青磁染付碗320は高台内に銘がある。染付皿323は底部内面に蛇の目軸刺ししている。

以上の出土遺物を先行する近世大坂の編年〔積山洋1993、佐藤隆2000、宮本康治2002、赤松和佳2002〕に照らし合わせると、これらが埋った時期は、SK35は遺物が少ないが18世紀前半と考えられ積山編年の8・9期に当る。SK39は新しく、肥前磁器端反碗やトビガンナにイッチンを飾る鍋の蓋が複数出土し、19世紀前半である。他の土壌は19世紀になって出土する瀬戸美濃焼磁器や関西系磁器・関西系陶器行平・萩焼・肥前磁器端反碗などの出土が1点ないし皆無で、これらが盛行する以前の時期であろう。積山編年の11・12期（18世紀後葉）より新しく、13期（19世紀前葉）より古いと思われる。また『大坂城跡』Xで報告したSK03の時期に近く〔大阪市文化財協会2009a pp.15-33〕、『難波宮址の研究』第十一のSK801〔大阪市文化財協会2000 pp.142-158〕よりやや新しいと思われる。これらの出土遺物の傾向から、調査地の遺構の時期を表1のとおり整理した。

産地別の比率は未検証だが、今回の資料に瀬戸美濃焼陶器が一定数認められ、大坂城跡・広島藩蔵屋敷跡の報告ではあまり出土例のない刷毛目碗・染付碗や皿・麦藁手蓋・笹茶碗・錢甕などがある。従来の報告が武家屋敷や蔵屋敷に当り、武士が使用したと考えられる資料が多いのに比べ、今回調査地の住人は町人であると思われる。階層によって陶磁器の好みが異なるのか、肥前陶器に比べ瀬戸美濃焼陶器が廉価で入手できたのか、流通の関係で瀬戸美濃焼陶器が数多く入ってきたのかなど、武家地以外の陶磁器の特徴をみることで、当時の生活の一端が明らかになるとと思われる。

5) 陶器生産関連資料

今回の調査では複数の遺構から陶器生産に係わる遺物が出土した。成形を行うための土型、焼成時に用いる窯道具、窯体片、および本焼き前の半製品である素焼き陶片である。以下、こうした分類にしたがって形態や文様の特徴を中心に記述する。また、第三章では遺構ごとに見える出土傾向や、これらの遺物群からどのようなやきもの工房が推定されるのかについて述べる。

i) 陶器土型

陶器を成形する土型324～336のうち、324～331はおおむね淡橙色を呈する、京焼(青木木米)の例[満岡忠成1990]や摂津三田焼(欽古堂亀祐)の例[三田市教育委員会2004]と同様の土師質焼成であるが、332～336は瓦質焼成である。後者は管見のかぎり他の窯場では類例のないものであり、今回調査地において陶器生産と瓦生産とが結び付いていたことを窺わせる興味深い資料である。

324は下端部の径が10cmと小さく、半球形に復元できる。下端部の面は平らであるが滑らかではなく、細かい粘土が付着していることから、いちど下半部と接合されていたものが外れたような状態に見える。急須の上半部の素焼き陶片とも考えられるが、土型から踏み返してつくられた元型(型を起こす元になる型)として報告する。その理由は、①内面調整と器壁の特徴、②施文方法、③胎土による。まず①については、内部を見せる必要がない器形とはいえ、内面の調整がほとんど省略されて粘土の接合痕が顕著であることに加えて、ここまで器壁が厚いものを製品と考えるには躊躇されるということである。また②の文様では、鶴の羽や松葉、網代文の一部が土型から外したのちに刀子などの工具で彫り直されている。とくに下端部の文様にそれが顕著なのは、下半部との接合時に文様がつぶれてしまうのを補う必要があるからであろう。こうした文様の補修は、これから釉を掛ける製品に対してよりも、それをもとに型を起こす際にこそ有効ではないかと考える。急須の元型には青木木米所用と伝えられる複数例が知られているが[京都国立博物館2006 p.184]、そのなかにはすべての文様を彫り付けるものとともに、文様を転写して一部を彫り直しているものもある(註8)。324はこの後者の一例である可能性が高い。③についても、素焼き陶片であることが明らかな358などと比べると、精良で白色系の胎土が用いられ、他の土型との類似性が高い。324はSK39から出土した。

325・326は接合しないが同一個体の可能性がある。天地を逆に見て急須などの土型とするにはやや小型すぎることや、器壁が薄いことから碗の土型と考えた。上端と下端に雷文帯を配し、その間の文様は車輪文を重ねたような円弧を組み合わせたものであるが、残存する部分が限られるので詳細はわからない。326はSK39から出土し、325も周辺での遺構検出中の出土であるが同じ遺構の可能性はある。

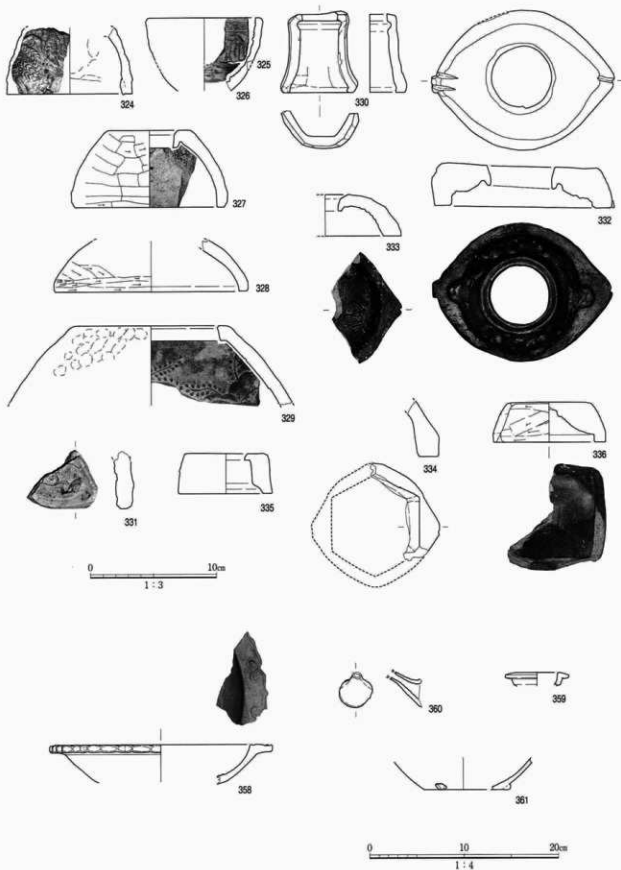


図33 陶器土型・素焼き陶片実測図

SK08(359・360)、SK17(335・336) SK39(324・325*・326・328・329*・330・331・361)、
SK55・56(333*・334*), SK69(358)、SK86(332) *印は当該遺構出土の可能性の高いもの

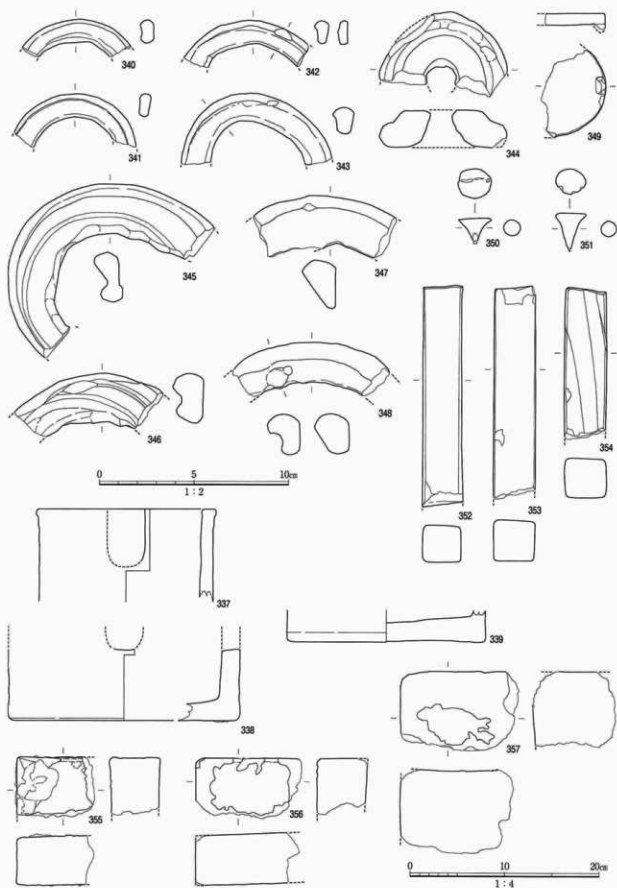


図34 竈道具・竈体片実測図

SK01(337*・338*・341*・343・344)、SK06(340・342)、SK08(339・356・357)、SK15(350)、SK23(349)、SK33(345・354)、SK39(346*・347・348・353*・355)、SK70(351)、不明(352) *印は当該遺構出土の可能性の高いもの

327は製品の口縁部が蓋を受けるようなつくりである。急須の上半部の土型と考える。円弧をなす太く緩やかな凹縁の内部を刺突文で埋めている(刺突は元型から転写した後に施されている)。転写された製品の文様は、口縁部全体が花卉をなすような表現であろう。下端部内面には上下を合せるための目印として元型に刻まれた「×」の半分が陽刻で転写されている。SK39から出土した。

328は文様がなく下半部の土型と考えることもできるが、文様がワンポイントの場合、その部分が残っていなかったという可能性もあり、とりあえず上半部として図化した。急須か土瓶、湯沸の土型であろう。SK39から出土した。

329は327などに比べて大型の製品で、口縁部は蓋を受ける形態ではない。土瓶か湯沸の土型であろう。文様は、長く伸びる両側一對の小さな花や大きな葉の表現から桐と考える。花の軸や葉脈などのラインは転写後に彫り直している(註9)。遺構検出中の出土であるが、SK39の可能性が高い。

330は瓶の口頸部をつくる左右に分割された土型である。口縁部の横断面は円形であるが、下端付近は六角形をなす。続く体部も六角形であろう。内面には成形時の布目が残る。SK39から出土した。

331は残存する側面や裏面の形状から全体の形を推定しづらいが、回転体ではないことは明らかなので、水滴あるいは香合の上面を加飾するための土型と考える。楕円形の中を細かい粟粒のような地文で埋め、その中に窪ませた唐草文(製品では浮き出る)を配置する。SK39から出土した。

332～336は上述したように瓦質焼成の土型である。

332はほぼ完存し、土型そのものの平面形は両端の尖った楕円形(杏仁形)をなすが、製品は平面円形である。口縁部が蓋を受けるつくりであり、左右一對の耳をつくり出すための窪みがある。半球形をなさないことから全体で数段に分かれている可能性があり、そうであれば最上段に当る。推定される製品としては土瓶か湯沸があり、あるいは丁子風炉の最上部なども想定できる。全周に瓢箪の実と葉の文様を巡らせる。外面の両端には1～2条の溝が焼成後に切込まれており、使用時に下の型と紐で縛るなどして固定させた可能性がある。こうした溝は後述する333・334にも見られるが、325～331の土師質焼成の土型には認められない。SK86から出土した。

333は一部しか残存していないが、342と同様の形状であろう。ワンポイントで半分の花文(菊花か)が施されている。肩部の1箇所には径6mmほどの突起があり、製品には孔が開いていたことがわかる。遺構検出中の出土であるがSK55・56の可能性もある。

334は製品の平面形が六角形をなす土型である。上下の向きは決め難いが、すばまる方を上にして図化した。細身の瓶、花入あるいは徳利などが考えられる。遺構検出中の出土であるがSK55・56の可能性もある。

335は小型の瓶の口頸部から肩部にかけての土型であろう。SK17から出土した。

336は扁平な四角錐をなす蓋の土型である。細かく施された文様は草葺屋根の表現かと考えられる。香炉の蓋の可能性もある。SK17から出土した。

ii) 窯道具

匣鉢337～339、輪トチ(註10)340～348、三脚付板トチ349、円錐ビン350・351、棚板355・356のほか、断面が方形の棒状土製品352～354がある。

匣鉢337・338は口縁部から体部中ほどにかけてU字形の削り込みをもつ。匣鉢詰めする際に土瓶の注口や行平の把手を外に出すためのものである。338・339の底部外面はナデ調整である。火を受けており判然としないが糸切り痕を消した可能性もある。339はSK08から出土した。337・338は遺構検出前の出土であるがSK01の可能性はある。

輪トチ340～348のうち、340～343は細い粘土紐、344～348は砂粒を多く含む太い粘土紐を用いている。340は径6.5cm前後の高台状の圧痕がある。344の一段低くなった外縁部は凸凹が著しいことから高台の痕跡とは考えられないが、中央の高い部分は平らな面をなしており、340とともに碗や鉢など比較的小法量の高台のある器形を据えたものであろう。341～343は径6.5～8.0cmほどに復元できる平らな底部の圧痕が認められる。345・346の径8.5cm前後の圧痕は深く断面V字状に入ることから、上げ底状の土瓶を据えたことがわかる。347・348は底部から斜め上方に立ち上がる体部最下部の圧痕が認められ、これらの製品の底部径は9cm前後と推定される。これら341～343・345～348は土瓶・鍋・行平などの器形に用いたものである。342・348には底部の脚の痕跡が認められる。340・342はSK06、343・344はSK01、345はSK33、347・348はSK39から出土した。341・346は遺構検出中に出土したもので、341はSK01、346はSK39の可能性はある。

三脚付板トチ349は、赤褐色を呈するやや粗い胎土の円板に、製品と同じ黄白色を呈する精良な胎土の円錐ピンを3箇所につける。円錐ピンを取り換えて円板部分を再利用する形式[佐藤隆2005a]ではなく、すべて1回きりの使用である。今回出土した窯道具のなかではもっとも古い特徴をもつ。SK23から出土した。

円錐ピン350・351は、上記のような円板と組み合わせるものより大型であることから単独で使用した可能性が高い。350はSK15、351はSK70から出土した。

棒状土製品352～354は、かつて大板城跡の調査で同形状のものが軟質施釉陶器に伴って釉が付着した状態で出土した例があることから、窯道具として報告する。ただし、今回の資料では釉の付着や熔着痕などの明確な使用痕跡は確認できなかった。また、352は瓦質焼成であり、瓦の窯道具の可能性もある。352は遺構の特定が難しい。353はSK39から出土した可能性がある。354はSK33から出土した。

棚板355・356は厚さ5cmほど(1寸半か)で、細片のため全体の大きさは不明である。連房式登窯内の窯詰め用いたものである。355はとくに表面の熔着やガラス化が著しい。355はSK39、356はSK08から出土した。

iii) 窯体片

レンガ形の357がある。表面はあまり火を受けておらず、焼け締まっていない。胎土は砂粒を多く含んで粗く、耐火粘土を使ったものではない。窯の補修や焼成時に出入口を閉鎖するため一時的に使用したものと考えられる。SK08から出土した。

iv) 素焼き陶片

358は口縁部が輪花をなす鉢の素焼き陶片である。口縁端部から内面にかけては型成形による。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部に近いところで外側に折れて水平方向に伸びる。口縁端部は上方にやや突出して、輪花の部分は唐草の巻き込むような表現が見られる。体部内面下半にも浮き出し

た文様があるが、何を表現したものかはわからない。SK69から出土した。

359は土瓶の蓋、360は注口部である。361は土瓶あるいは鍋・行平の底部である。359・360はSK08、361はSK39から出土した。

6) ミニチュア土製品と生産関連資料

今回出土したミニチュア土製品は、399点にのぼる。そのうち土人形198点(人物115点・動物83点)、飯事道具56点、箱庭道具24点、型13点、絵銭76点、独楽2点、土鈴(土玉含む)6点、面7点、兜1点、泥面子1点、面型1点、不明14点である。18世紀前半のSK19・35を除けば18世紀後半～19世紀前半にかけての遺構から出土したもので、これまでの大阪市内で出土した同時期のミニチュア土製品とよく似たモチーフや組成であるが、この調査地で特筆すべきものは以下のことがあげられる。

- ①土人形・飯事道具・箱庭道具・面などの型が出土。
- ②牛、猿以外の瓦質の土人形が出土。
- ③3～4 cmほどの小型(以後極小型とする)の土人形や箱庭道具がまとまって出土。
- ④絵銭が大量に出土。

これらの点は、大阪市内のこれまで出土のミニチュア土製品とは異なった様相を示している。[大阪市文化財協会2009a pp.34-43・54-55、2009b pp.28-32・52-53]

今回は多数の土壌のうち、上記の特徴の顕著なSK35・39・55(・56)・70・82を報告する(図35・36)。土壌の時期は、共伴の陶磁器により決定した。

SK35: この土壌から絵銭が64点と土鈴の小片が1点出土した。絵銭は模様により3種類に分類できる。それぞれ表面に布袋(362)・大黒(363)・駒引き?(364)が描かれている。裏面の上部には布袋銭は「宝珠」が、大黒銭は「吉」の文字が書かれており、布袋銭が56点、大黒銭が7点出土した。駒引き?銭は1点である。すべて焼成は土師質で、両面型合わせ成形である。

SK39 この土壌からは土人形の猫1点と、飯事道具の型4点が出土している。飯事道具の型は、片口の鍋415と壺416・皿?417・418があり、いずれも胎土は緻密である。416は左右半分ずつの型で、内側は滑らかに仕上げられているが、外側は凸凹である。皿の型と考えられるものは2点あり、凸形と凹形である。418は凸側が型として使用されており、端部が斜め上方に立ち上がっている。417は凹側が型であり、端部はヘラ状のものできれいに面取りされている。417と418は直径がほぼ同じで、端部の立ち上がりと面取りの角度も一致することから、この2点がセットで使用された可能性が高い。

SK55・56 この土壌からは瓦質の天神420と猿の型419が各1点、飯事道具の竜の破片1点が出土した。420は両脇に狛犬を配した立派なもので、型合わせの中実である。底部に空けられた穴は直径2 cm、長さ3 cmを測る大きなものの奥に、さらに直径5 mmの穴が2 cmほど続いている。419は猿の背面の型である。内面は滑らかに仕上げられ、猿の毛を線刻で一面に表現しているが、外面は凸凹がある。型の厚さは0.5～2 cmを測る。

SK70 この土壌からは土人形52点、飯事道具5点、箱庭道具7点、飯事道具の型は410が1点出土している。この土壌の特徴は、極小型がまとまって出土していることである。型合わせでの中実の



図35 ミニチュア土製品①

SK29(406), SK35(362~364), SK70(367・368・377・386~388・393・395・396・401),
SK82(365・366・369~376・378~385・389~392・394・397~400・402~405)

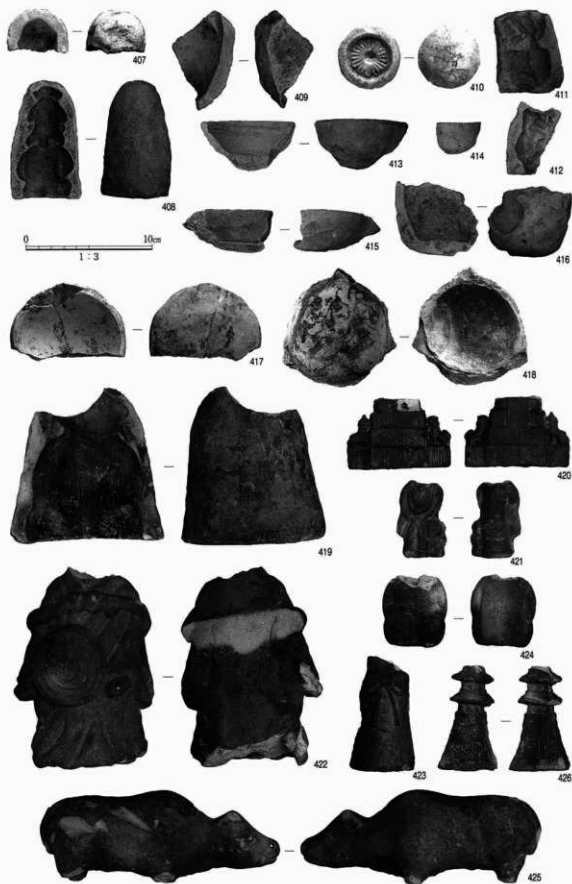


図36 ミニチュア土製品②・同土型

SK02(407)、SK17(411)、SK19(422)、SK39(415~418)、SK55・56(419・420)、SK70(410)、
SK80(424)、SK82(408・409・413・414・425・426)、その他(412・421・423)

表7 ミニチュア土製品一覧

	通称	分類	器種	製作技法	形状	胎土	地成方法	色調	彩色	穴の 大きさ	法量			備考	
											幅	厚	高		
362	SK36	銭	銭銭 布袋	型合わせ		密	土師質	にぶい褐色			径6.2		1.0		
363	SK35	銭	銭銭 大黒	型合わせ		密	土師質	にぶい褐色			径6.2		1.1		
364	SK35	銭	銭銭 胴引き?	型合わせ		密	土師質	褐色			(径6.2)		1.0		
365	SK82	人物	西行	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	2.2	1.8	(3.4)	六3個	
366	SK82	人物	天神	型合わせ	中実	密	土師質	褐色		小	3.2	1.4	(2.2)		
367	SK70	人物	堂入り天神	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	3.4	1.4	3.7		
368	SK70	人物	武人	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	3.1	1.8	(5.0)		
369	SK82	人物	布袋	型合わせ	中実	密	土師質	浅黄褐色		小	2.3	1.6	(2.9)		
370	SK82	動物	猿 三番足	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	3.4	1.7	(3.7)		
371	SK82	人物	立像 佛師	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	2.6	1.6	(4.3)		
372	SK82	人物	唐人	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	2.2	1.4	(3.6)		
373	SK82	人物	男性立像	型合わせ	中実	密	土師質	褐色		小	2.2	1.8	(3.7)		
374	SK82	人物	男性立像	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	2.3	1.7	(3.5)		
375	SK82	人物	僧像 力士?	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	2.8	1.8	(2.5)		
376	SK82	動物	狐	型合わせ	中実	密	土師質	にぶい褐色		小	2.7	1.4	3.9		
377	SK70	動物	狐	型合わせ	中実	密	土師質	にぶい褐色		小	2.2	2.0	(3.1)		
378	SK82	動物	狢犬	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	3.4	(1.0)	(3.2)		
379	SK82	動物	馬	型合わせ	中実	密	土師質	褐色		小	(3.7)	1.7	4.3		
380	SK82	動物	馬	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	3.3	2.0	(3.4)		
381	SK82	動物	牛	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	(3.6)	2.4	3.3		
382	SK82	動物	牛	型合わせ	中実	密	土師質	浅黄褐色		なし?	(3.3)	(0.8)	3.1		
383	SK82	動物	亀	型合わせ	中実	密	土師質	浅黄褐色		小	3.6	2.6	1.2		
384	SK82	動物	鳥	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	(2.1)	1.9	(3.2)		
385	SK82	動物	鹿	型合わせ	中実	密	土師質	にぶい黄褐色		小	3.3	1.9	2.7		
386	SK70	動物	鹿	型合わせ	中実	密	土師質	にぶい黄褐色		小	3.1	1.8	(2.1)		
387	SK70	動物	猪	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	1.7	1.7	(2.7)		
388	SK70	動物	鹿鹿	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	2.2	2.1	4.5		
389	SK82	人物	仏像 地藏	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		大	3.2	3.8	(7.9)		
390	SK82	人物	天神	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		中	4.1	1.8	(3.4)		
391	SK82	人物	天神	型合わせ	中実	密	土師質	浅黄褐色		大	5.4	(1.9)	(4.4)		
392	SK82	人物	天神	型合わせ	中実	密	土師質	淡褐色		大	6.2	2.6	(5.8)		
393	SK70	人物	赤ん坊	型合わせ	中実	密	土師質	褐色		なし	7.9	4.8	1.9	さし置	
394	SK82	人物	女性	型合わせ	中実	密	土師質	淡褐色		大	3.3	2.6	(6.3)		
395	SK70	人物	男性	型合わせ	中実	密	土師質	浅黄褐色		小	2.7	2.3	(4.4)		
396	SK70	人物	男性	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色	黒粉	小	2.9	2.2	(4.6)		
397	SK82	人物	獅子舞	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		小	3.0	2.3	3.9		
398	SK82	人物	女性座像	型合わせ	中実	密	土師質	浅黄褐色		大	3.5	2.7	(4.6)		
399	SK82	動物	狐	型合わせ	中実	やや粗	土師質	にぶい褐色		大	(4.1)	2.1	(5.2)		
400	SK82	動物	狢犬	型合わせ	中実	密	土師質	にぶい褐色		小	3.8	1.9	(4.4)		
401	SK70	動物	獅子	型合わせ	中実	密	土師質	灰白色		なし	4.7	2.4	3.0		
402	SK82	動物	馬	型合わせ	中実	密	土師質	にぶい褐色		小	5.0	2.2	(4.2)		
403	SK82	動物	馬	型合わせ	中実	やや粗	土師質	明黄褐色		大	7.1	2.3	5.8		
404	SK82	動物	鳥	型合わせ	中実	やや粗	土師質	褐色	赤	大	(4.8)	2.9	(5.0)		
405	SK82	面	狐	型押し		密	土師質	明黄褐色			6.7	5.4	3.5		
406	SK29	面鏡	布袋?	手捻り		密	土師質	浅黄褐色			(3.9)	2.0	4.9		
407	SK02	型	陽物?	手捻り		密	土師質	褐色			4.8	(2.5)	(3.4)		
408	SK82	型	猿	手捻り		密	土師質	にぶい褐色			5.5	4.4	(9.4)		
409	SK82	型	狐	手捻り		密	土師質	にぶい褐色			(5.6)	(3.6)	(7.3)		
410	SK70	型	鹿	手捻り		密	土師質	浅黄褐色			径4.9		1.2		
411	SK17	型	不明	手捻り		密	土師質	にぶい褐色			(4.8)	(2.7)	(6.2)		
412	その他	型	箱庭	手捻り		密	土師質	にぶい褐色			(3.8)	(3.2)	(5.8)		
413	SK82	型	狸鉢	手捻り		密	土師質	褐色			径8.2		(3.8)		
414	SK82	型	罎? (内膳?)	手捻り		密	土師質	褐色			(径2.2)		(2.5)		
415	SK39	型	片口罎	手捻り		密	土師質	明黄褐色			(7.2)	(3.5)	(3.3)		
416	SK39	型	罎	手捻り		密	土師質	明黄褐色			(6.5)	4.1	(5.5)		
417	SK39	型	罎? (四型)	手捻り		密	土師質	浅黄褐色			径9.1		2.6		
418	SK39	型	罎? (凸型)	手捻り		密	土師質	浅黄褐色			(9.0)	(5.9)	2.0		
419	SK35-56	型	猿	手捻り		密	土師質	暗灰色			12	6.1	(12.4)		
420	SK35-56	人物	天神	型合わせ	中実	密	土師質	暗灰色		大	8.0	2.9	(5.4)		
421	その他	人物	子連れ	型合わせ	中実	密	土師質	灰色		中	4.0	2.6	(6.2)		
422	SK19	人物	西行	手捻り?	中空	やや粗	土師質	灰色		開放	11.1	(9.1)	(15.7)		
423	その他	人物	立像	型合わせ	中空	密	土師質	暗灰色		開放	(5.2)	(2.4)	(8.9)		
424	SK80	動物	狐	型合わせ	中実	密	土師質	灰色		大	4.9	4.3	(5.3)		
425	SK82	動物	牛	型合わせ	中空	やや粗	土師質	暗灰色		開放	18.9	5.8	(7.2)		
426	SK82	動物	猪	型合わせ	中実	密	土師質	暗灰色		大	4.6	4.6	(8.2)		

分類は「大阪市文化財協会2009a pp.34-43」による。

土人形には小型と極小型の2種類があり、人物は小型が7点、極小型が26点、動物は小型が8点、極小型が10点を数える。箱庭道具は7点中4点が極小型である。小型の土人形で「はいはいする赤ん坊」393は、これまで大坂ではあまり出土例がなく、近世墓で1点出土しているにすぎない。410は飯事道具の蓋の型で、12弁の菊花状の模様である。飯事道具の皿1点が軟質施釉のほかは、すべて土師質である。胎土は、小型で赤褐色のものにやや粗いものも数点みられるが、極小型のものはすべて緻密である。胎土の緻密なもの、底部の穴が串状の小さいものである。

SK82 この土壌もSK70と同様、極小型のものがまとまって出土した。土人形の人物は38点、動物30点、飯事道具7点、箱庭道具4点、面7点、土鈴(土玉を含む)2点、独楽1点、型3点である。

極小型の土人形は人物と動物に限られ、人物は15点、動物は14点を数える。ただ小型とした中には、小型と極小型の中間の大きさのものもあり、同じモチーフで大・中・小の3種類がみられるものがある。焼成は瓦質の牛425・槽426を除けばすべて土師質である。型には土人形の猿408・面の狐409・飯事道具の描針413がある。いずれも内側は滑らかに仕上げられているが、外側は凸凹である。408は親猿が子猿を肩車したモチーフで、背面側の半分の型である。狐は顔のみで、その型で作られたと考えられる面が4点出土している。413は外面の型であり、針の可能性もある。型はすべて土師質で、胎土は緻密である。

他に興味深い点として、次のことがあげられる。

- 飯事道具の鉢の裏面に書かれた文字である。「左近」、「佐近」、「なにはのすかね」の3種類がある。それぞれに特徴があり、工人の目印やブランドを示すものであるかもしれない。
- 瓦質の土人形は、大坂や京都ではこれまで牛や猿に多くみられる。大坂では他に大型の西行、鳩が各1点出土している[大阪市文化財協会2004 pp.169-181]が、西行以外の人物や箱庭道具をモチーフにしたものは出土していない。本調査地では、西行422、猿424と牛425以外に、天神420や人物の女性立像421・423、槽426が出土している。
- 焼け歪んだ飯事道具が数点出土している。

以上のことから、

- ・瓦質の土人形が出土したことから、瓦窯で人形が焼かれている。
- ・焼け歪んだ鉢や蓋、皿が出土することから、この周辺で飯事道具が焼かれていた。
- ・型が出土したことにより、この周辺でミニチュア土製品が製作されていた。

と考えられ、18世紀後半～19世紀前半頃には、大坂で土製品が製作されていたことが明らかになった。

7) ペンガラ生産関連資料

i) 焙烙

表1のとおり、18世紀後半～19世紀前半の土壌からペンガラの付着した焙烙が多量に出土した。とくにSK01・SK70・SK82などの大型廃棄土壌のほか、小型のSK09などで顕著であった。ここではSK01出土のうち残りのよいものを報告する。すべて積山編年にいうD類で、口唇部に把手を作らず確認できたものでは1、2個の小穴を穿つ3類である[積山洋1995]。外面に刻印するもの433・436

があるが判読できない。およそ18世紀後半から19世紀にかけてみられるもので、陶磁器の年代観とも矛盾しない。ベンガラは内面のみ、または内外両面に付着し、ベンガラ生産に使用され、一括で大量に廃棄されたものと考えられる。

18世紀後半になると、ベンガラの主たる生産方法として従来の鉄丹ベンガラに加え、備中吹屋(現岡山県高梁市)で緑礬^{ろうはん}を原料とするものが現れる。どちらの方法によるものかが重要な意味を持つため、SK01出土の焙烙片3点を分析したところ、後述のように鉄丹を原料とするものとの結論を得た。

また、SK06から丸瓦(凸面)にベンガラを塗布した破片が1点出土して注目されるが、唯一の資料であり、ベンガラの生産目的については今後の検討課題である。

なお、同様に大量の焙烙が出土した調査では、天満本願寺跡TN04-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]、高津御蔵跡KD07-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]があり、本調査地例は大阪市内で3例目になる。

ii) 文献史料

近世大坂は文献史料にもベンガラ生産活動に関連する記録が若干残されている。近世大坂の人名録・商業案内・地誌である『難波丸欄目』[多治比・日野編1977]の1748(延享5)年から1759(宝暦9)年までの版には、「諸職商人所付」の「弁柄煮土」の項に「平野町浜」とある。一方、1777(安永6)年から1839(天保10)年までの版には、同項に「高津、安堂寺町、幕屋町」の3箇所の地名が挙げられているほか、「弁柄師 製法人」の項に「高津 寺田孫六、安堂寺町一丁目 住吉や次(沢?)兵衛、富島二丁目 山城屋兵衛、北久太郎町三丁目大和屋弥兵衛」の3名の名前がある[多治比・日野編1977]。

これらの記録がどういった原料を用いたベンガラ生産に関するものかは不明だが、今回の調査結果から、18世紀後半には大坂で鉄丹によるベンガラ生産が行われていたことが考古学的に明らかとなった。天満本願寺跡と高津御蔵跡の2例は分析されていないが、時期は19世紀代前半で本例より降る。備中吹屋で最初に緑礬^{ろうはん}の量産に成功したのが1751(宝暦元)年とされるため[成羽町史編集委員会編1991]、大坂における緑礬ベンガラの生産については、今後の分析研究の進展を待つ必要がある。

また、ベンガラ生産が行われた場所に関しては、前掲両書とも「弁柄煮土」・「弁柄師 製法人」の項に今回の調査が行われた南瓦屋町の地名や寺島氏の名は記載されていないが、記

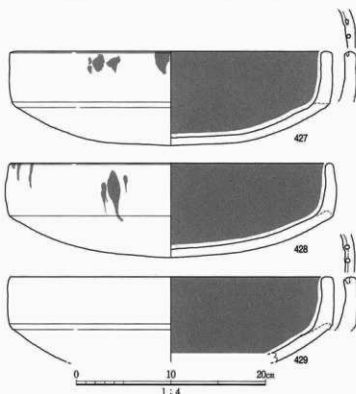


図37 SK01出土焙烙実測図①

録に残る地名のうち安堂寺町や高津は調査地に近接していることから、その関係が注目される。

iii) ペンガラ分析結果

a. 分析対象試料

対象はSK01出土資料3点である。焙烙片の内面に付着した鮮やかな真紅色を呈する粉状の赤色顔料を試料1、鮮やかな真紅色とやや黒ずんだ暗赤褐色系の色相が混在する赤色顔料を試料2、黄褐色もしくは茶色系を呈するとくに試料1とは色相が大きく異なる中間生成物と想定される試料を試料3とした。

b. 分析方法

- (1) 赤色顔料の色調や付着状況、粒子の集合状態に関する目視および金属顕微鏡観察
- (2) 電子顕微鏡による個々の顔料粒子の形態や集合状態に関する細部(高倍率: 50,000倍)観察

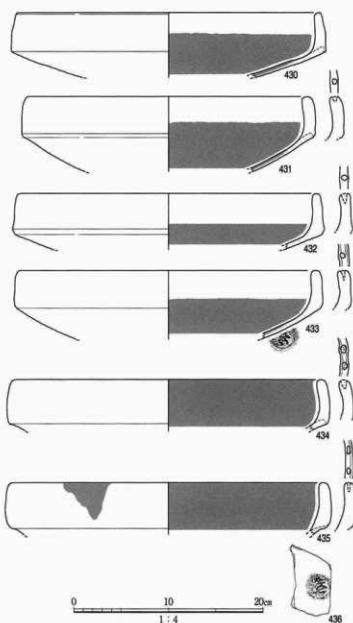


図38 SK01出土焙烙実測図②

- (3) 蛍光X線分析やX線回折分析による赤色顔料および中間生成物の同定

c. 分析結果

- (1) 焙烙片に付着した赤色顔料は、一部泡立ったような気泡痕や吹き上がり、さらには吹き零れ痕跡も確認された。そのため焙烙に充填した原材料は水分を含んだ状態の物質であり、これを加熱して赤色顔料を生産したものと推測される。

- (2) 電子顕微鏡による高倍率観察では、試料1の赤色顔料の個々の粒子形態は、基本的には均質な形状を有する0.1 μ m程度のやや角ばった球状超微粒子であった。試料3は非晶質物質であった。

- (3) 試料1・2・3ともに構成無機元素はいずれも鉄(Fe)のみが検出された。これらの鉱物結晶相は、分析の結果、試料1は極めて純度が高い酸化第二鉄(α -Fe₂O₃)、試料2は純度が高い酸化第二鉄(α -Fe₂O₃)に若干のマグヘマイト(γ -Fe₂O₃)もしくはマグネタイト(FeO $\cdot$ Fe₂O₃)と非晶質の含水酸化鉄(FeO $\cdot$ OH)、試料3はマグヘマ

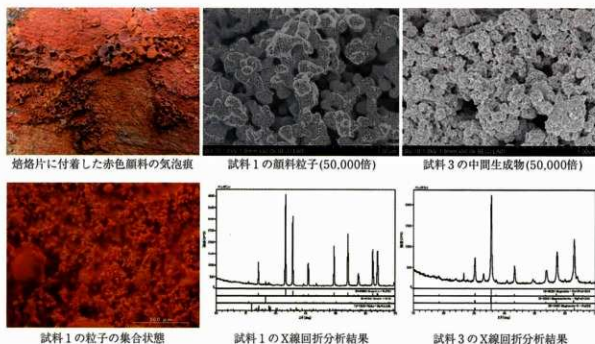


図39 ベンガラ試料写真と分析結果

イト(γ - Fe_2O_3)もしくはマグネタイト($\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$)と非晶質の含水酸化鉄($\text{Fe}(\text{OH})_3$)であった。そのため、試料1は製品となるベンガラ顔料、試料3はその原材料である鉄素材と鉄サビ、試料2はその中間生成物をも若干含んだベンガラ顔料であった。

- (4)以上の結果から、これらは鉄屑の鉄サビを原材料とし、水分を含んだままこれを加熱～水酸化して生産する鉄丹ベンガラ(人造ベンガラの一種類)の生産に関連する資料群であると理解した。

なお本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C) (細目:文化財科学:課題番号19500872)「建築文化財における外観塗装材料の変遷と新塗料開発に関する研究」[研究代表者:北野信彦]の平成21年度経費で実施し、成果の一部を含む。また、参考文献として[北野信彦・肥塚隆保1998]を参照されたい。

8) 金属加工関連資料ほか

金属加工に関連する遺物を概観すると、鑄造・鍛冶・銅精錬・真鍮生産の4つの業種のものに分類できる。点数的には鑄型など鑄造関連のものが118点と多い。鍛冶に関わるものは羽口17点と鍛冶滓8点である。銅精錬と真鍮生産については各1点のみの出土ではあるが、それぞれの業種を明瞭に指し示す特徴を持っているのであえて取り上げた。該当する資料は総じて18世紀前半～19世紀前半の時期に相当すると考えられる。資料の分類と、遺構ごとの出土点数を表8に示した。分類ごとの点数については、複数の職種によるものが混在していることなどから曖昧なまま振り分けた資料も少なくない。判然としないものについては本文中にその旨記したので御注意いただきたい。

i) 鑄造

出土した鑄型を造型方法から分類すると、挽型法と込型法(埋け込み鑄型を含む)の2つに分かれる。挽型法による鑄型のうち、鑄肌面が残るのは437と438で、437は文様や円弧の大きさから鋳口が想定される。438は宝珠のような楕円体を呈している。挽型に用いたと思われる粗型は多数見つかった

いる。比較的残りの良い439・440は通常の挽型の粗型を半載した形のもので、外側には手を掛けて持ち上げるための凹みが彫られている。これは挽板を使った成形後に鋳型を2つに割ることで内面の文様など細部の造型をし易くするための工夫と思われる。鋳肌が残っていないため作られた製品を特定することは出来ないが、龍頭や撞座の鋳型などとの関連から半鐘が考えられる。441・442の2点については粗型として扱っているが、上辺部の切込みや胎土の調整から炉の未製品の可能性もある。

込型法による鋳型の中で製品が特定できるものとして唐獅子443～447・獣脚448～456・竹形457・458・龍頭459・460・撞座461～463・乳464～466・銘文467の7種類がある。

唐獅子鋳型でつくられる製品はレリーフ状で、灯籠の中台や基壇の側面に取り付けられるタイプのものである。唐獅子鋳型はその造作や緻密で硬い胎土から埋け込みの鋳型(註11)と考えているが、製品部分の外周を巡る平面の処理の仕方や塗型の範囲などから、埋け込むのではなく唐獅子のみを鋳造するための鋳型の可能性もある。この場合、別で鋳造した本体へ取り付けるのだが、そのような造りの灯籠は少なくない。見つかった唐獅子の鋳型はすべて顔の部分で、同じ意匠のものは無い。

なお、唐獅子鋳型については、模りした型の写真を実測図に添えた。

獣脚の鋳型は香炉の脚部などを想定して分類しているが、全体がわかるような資料がなく、必ずしも断定できるわけではない。主な形態としては、文様があり唐獅子鋳型同様の胎土のもの448・451～453と、文様は無く挽型の粗型に似た胎土に肌土を貼ったもの454～456の2つに分かれる。前者は唐

表 8 金属加工関連資料出土遺構一覧

	鋳造													鍛冶		銅精錬	真鍮生産	不明			計		
	鋳型											支脚	羽口	炉	洋	羽口	洋	カウミ	増埴	ブロンズ(目地)		円盤状	その他
	挽型		込型							不明													
	開口	粗型	唐獅子	獸脚	竹形	龍頭	撞座	乳	銘文														
SK01		6	1	2		1	1	1					3	2					1 (1)			19	
SK02		2			1								5		2				2 (1)			13	
SK03																			3			3	
SK06				1		1	1		1						1		1			4		10	
SK15										1												1	
SK33		1																				1	
SK38															1							1	
SK39		27		1							1				1	2					4	36	
SK40										1												1	
SE60				2																		2	
SK69					1																	1	
SK70	1			2		3	1	3					5		10	5			3 (1)	1	1	35	
SK82		1	3		3	3				1	2	1	2						(8)			24	
SK86			9	7		1		1		4					2	1			(1)			26	
その他													1					1	1 (3)		2	9	
計	1	37	13	15	5	9	3	5	1	7	3	1	16	2	17	8	1	1	25	5	7	182	
	118													25		1	1	37					

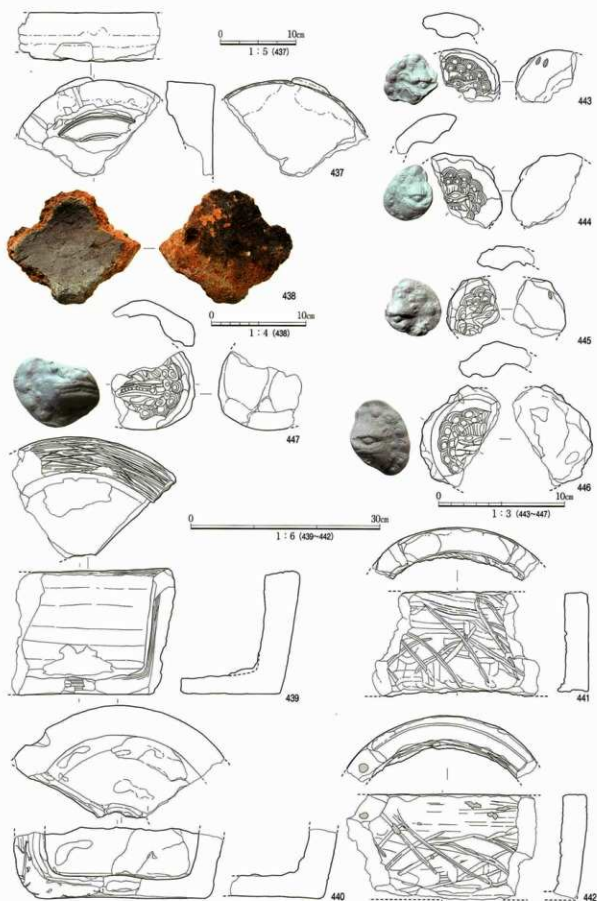


图40 铜製品铸型实测图①

SK01(443)、SK02(441·442)、SK39(439·440)、SK70(437)、SK86(438·444~447)

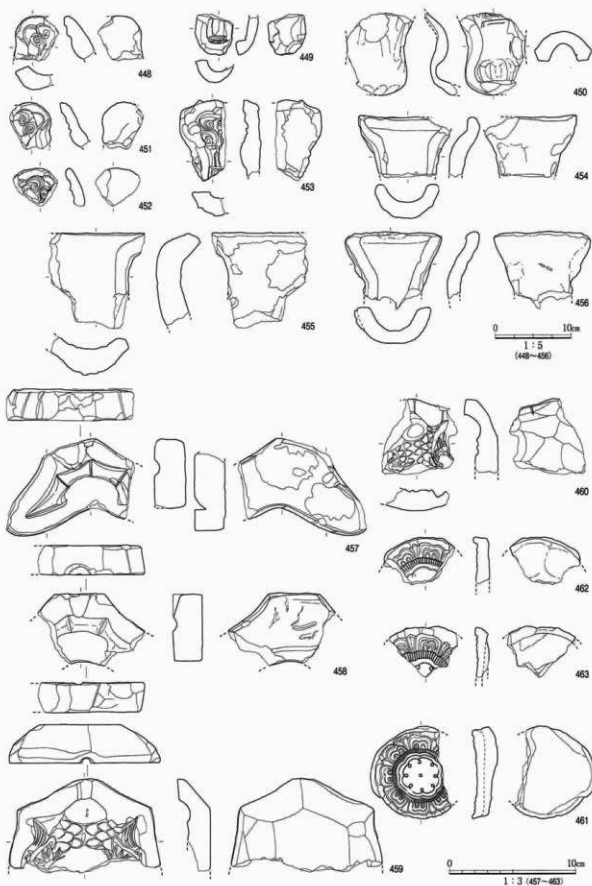


图41 銅製品銹型実測図②

SK01(455・461)、SK06(463)、SK39(450)、SK69(457)、SK70(454・459・462)、
SK82(458・460)、SK86(448・449・451~453・456)

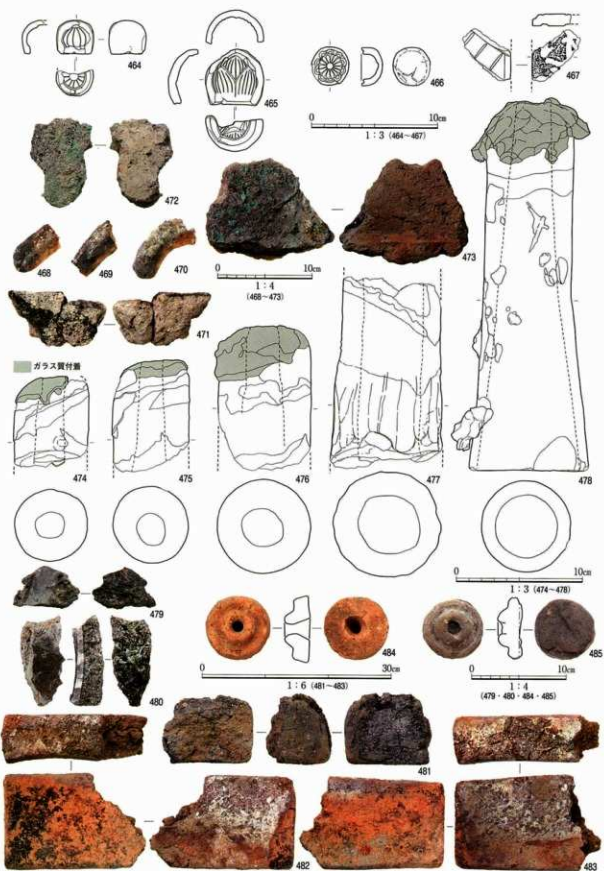


図42 銅製品鋳型実測図③・その他

SK01(465・472)、SK02(473・475・481)、SK06(467・479・484・485)、SK39(470・476・478)、SK70(464*・471・474・476・482・483)、SK82(468・469・477)、SK86(466)、遺構検出中(480)、*印は当該遺構出土の可能性の高いもの

獅子の尻から後足、尾の部分の様にも見えるが、製品の外周を巡る面が曲面になっている事から、前述の唐獅子の鋳型とは異なり、主たる製品側の曲面部分に取り付く。同じ意匠の破片が見受けられる。450は鋳肌土は残っていないが、獣脚の意匠が見て取れる。

竹形鋳型の胎土は唐獅子と同様である。湯口がつけられ、外面には合印が刻まれていることから、2面1組で鋳型を組み合わせ鋳造したと思われる。器物の取っ手あるいは環付きのように見える。いづれにしても何らかの器物の一部として用いられたものであろう。

龍頭・撞座・乳は鐘の生産に関わる埋け込みの鋳型であることは間違いなく、その大きさから半鐘のものと思われる。他に、文字を鋳出すための埋け込みの鋳型(467)が1点出土している。

焼成用支脚468～470は中子等を焼成・乾燥する際に用いる土製の道具である。3点のみ出土した。

炉・埴場への分類は、地金の溶解に用いられたであろう器物の破片をすべて含め、表中に点数をあげた。また、緑青色の付着物が認められること、現時点では鋳造以外の作業を積極的に指し示す要素が認められていないことなどから、鋳造の範疇に置いた。これらの中で確実に鋳造炉と判断できるものは473の1点のみである。他のものについては高熱を受けてはいるものの、ガラス化・石化しているというよりはカスカスの状態で軽いものが多く、必ずしも鋳造炉のイメージには当てはまらない。471・472は埴場もしくは瓶炉以外の溶解炉の可能性がある。473の内表面に付着している緑色錆の成分分析を行ったところ主成分は銅で、他に錫・鉛などを検出した。

ii) 鍛冶

羽口には小鍛冶の作業で使用したと思われる474～476と、これらとは異なる477・478がある。小鍛冶のものには先端付近外径50mm(孔径10mm)程のものから70mm(孔径30mm前後)を超えるものまであるがそれぞれの規格性は高く、大阪市域の調査で近世の遺構・包含層からよく見つかるタイプのものである。478は先端に鉋滓が付着しているので羽口と思われるが、これまでに大阪市域で見ついている鍛冶の羽口で類似するものは無い。確認のため先端の付着物の成分分析を行ったところ多量の鉄を検出したので、何らかの鍛冶作業もしくはこれに類する作業に使用されたものと考えられる。477は手づくねの円筒形土製品で、その形状から羽口と思われるが使用痕跡は認められない。内径が45mmほどあるため、羽口であるならば鋳造用のものである。

以上のほか、金属加工関連の遺物として479(銅精錬)と480(真鍮生産)が特筆すべきものである。

iii) 銅精錬

479は銅の精錬に関わる「カラミ」と呼ばれるものに酷似している。同様のものが住友銅吹所跡の発掘調査で見つかっている。成分分析の結果を比較したところ、住友銅吹所跡出土品が鉄を主成分として少量の鉛を含んでいたのに対して、479からは多量の鉛を検出した。外観からはカラミと判断できるが成分組成が全く異なっていることから、どのような作業で生成されたものであるのかは再考を要する。

iv) 真鍮生産

480は真鍮(黄銅)の地金を溶解するための「梅干壺埴場」の破片である。本来の姿は縦長円軸剥の埴場で、胴の中央あたりに直径3cmほどの送風孔が開けられている。また、埴場の下半部には梅干壺

様の壺が胎土中に埋められている。つまり、その壺を芯にして増埴を造っているわけで、耐久性をあげるための工夫と思われる(註12)。出土品はこの部分の破片である。梅干壺増埴は真鍮地金を生産する作業に使用されたもので、鑄造の作業に用いられることはない。内面の白色部分の成分分析を行ったところ、真鍮の成分である亜鉛を多量に検出した。

以上4種に分類された資料のほかに、ブロック状の土製品(481～483)、およびブロックを芯材として塗り固めた壁土が見つかっている。被熱の程度や形状は様々で、鑄型の芯材、炉や竈などの構造物に用いられていたものが混在していると思われるが、特定はできていない。

また、不明品の中に円盤状の土製品(484・485)がある。形は盃で表面の仕上げも雑である。これ自身が製品とは言い難く、また、鑄造や鍛冶の作業に関わる土製品としても思い当るものはない。

9) その他の遺物

以上のほか、金属製品として鉄を素材としたものに釘・滑車・鉄片があり、銅を素材としたものに箸・釘・銅線・煙管(雁首・吸い口)・銭がある。これらは生活用具が破損して破棄されたものと考えられるが、上記の金属加工業の原料として再利用するため持ち込まれた可能性もある。出土遺構にはSK01・02・06・70・82・86などの大型土壌を含むが、種類や量に目立つ傾向は認められない。いずれにしても少量のため、その性格は不明である。

また、石製品として硯が2点出土したほか、砥石が、14点出土した。粘板岩を材料とした板状の砥石4点のほかは砂岩をはじめとする柱状の砥石である。柱状の砥石には基部の太さが4.5cm程度で、先端が折れた多面錐形をなすものが多い。長さは5～10cm前後だが、本来はもう少し長いものであったのであろう。各面の幅はばらつきが大きい。対象物に対して砥石を動かすような使用状況が想定される。

10) SK82出土貝類

本調査で出土した動物遺体はごく少量で、僅少な獣骨のほか、SK82の埋土に貝類がブロック状に投棄されていた。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954]を利用しており、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

18世紀後葉～19世紀前葉のSK82から土嚢袋26袋分の埋土サンプルを水洗選別した結果、5種、509個体の貝類を回収した。貝種構成はハマグリが162個体(32%)、ヤマトシジミが341個体(67%)で、そのほかにはカワニナが4個体、アワビ類とオオタニシが各1個体含まれるのみである。このうちハマグリ・アワビ類は鹹水性種、ヤマトシジミは汽水種、カワニナ・オオタニシは淡水種で、いずれも食用となりうる。また、ハマグリは殻高計測値が18.7～55.2mmで、平均値は26.7mm(計測数51個体)と、小型の個体を主体としている。

これまでの調査から近世における大板城下町跡出土貝類の構成比の推移を見ると、17世紀代は圧倒的多数を占めていたハマグリが18世紀代には5割程度に減少し、19世紀代にはヤマトシジミに筆頭貝種の地位を譲り渡すことが判明しており[池田研2005]、今回出土した資料はそうした傾向に合致した

内容を示している。また、アワビ類やアカガイなどの高級種や、饗宴に用いられるサザエ・アカニシなどの大型巻貝がほとんど含まれていない点が注目される。

註)

- (1) 文様を表す場合、とくに家紋・寺紋・神紋については「紋」字を当て、その他は「文」字を当てて区別した。
- (2) 小林伝統製瓦(兵庫県姫路市)の小林義一氏からご教示を得た。
- (3) [京都国立博物館2006 pp.125・303]にある土壙G593出土の碗で、この土壙の時期は1740～1770年頃と考えられている。
- (4) 畑中英二氏の信楽焼編年の4期中段階で、18世紀第4四半期頃のものと思われる[畑中2006]。
- (5) これら2点の碗は瀬戸市史[瀬戸市史編纂委員会1998]によると近世瀬戸の編年の第3段階8・9期(18世紀末～19世紀初め)に焼かれたものである。
- (6) 肥前の弥源次窯からよく似た形文様のものが出土している[近世九州陶磁学会2000]。17世紀後半に位置付けられている。
- (7) 京都公家町[京都市埋蔵文化財研究所2004a]のC区の土壙C628-24とE区の土壙E45-34で、記述は無いが、器形・施釉がよく似た実測図がある。土壙E45の遺物は法量もよく似ている。土壙の時期は18世紀中ごろから後半である。
- (8) 京都国立博物館の特別展覧会「京焼～みやこの意匠と技～」において実見した。
- (9) こうした転写後の文様の彫り直しは、大阪市立美術館所蔵の三田焼土型でも確認した。資料の熟覧においては同美術館 守屋雅史氏のご配慮を得た。
- (10) 窯道具の名称は瀬戸美濃系と肥前系とは異なるものが多く、また、瀬戸美濃系の技術を基盤として成立した京焼においても、磁器生産は肥前系の技術を導入しており、複数系統の名称が混在する。各地の窯場における窯道具の名称は当然ながら影響を濃く受けたこれらの技術系譜が反映されている。今回の場合、その組成や製品の特徴から瀬戸美濃系を源流とする京焼の陶器焼成技術が用いられたと考えられることから、こうした名称を用いた。
- (11) 埋け込みの鋳型とは、文様など製品の部分を鋳出すための素焼きの鋳型で、主たる鋳型の当該箇所を削り、そこへ埋め込んで使用する。挽型法による造型で用いられることが多く、梵鐘の乳や龍頭、撞座など挽板の回転だけでは造型できない部分を鋳出すための手法である。
- (12) 京都市柳池小学校校跡の調査では壺の入っていない同類の埴壇が多数見つかっている。これらは被熱による変形が著しい。

第Ⅲ章 地層と遺物の検討

第1節 上町台地北部の崩壊性地すべりとその年代について

1) 上町台地北部の崩壊性地すべり

第3層は碎屑物偽礫を特徴とし、上部・下部に区分できる(図5～7)。下部層は長辺の長さが3 mを超える青灰色粘土や極粗粒～粗粒砂からなるブロック(岩塊)をはじめとする大小の偽礫からなる混合体であり、中に薄い黒色焼土・炭層を挟み、少量の近世瓦や瓦器細片を含んでいた。ブロック内部には、微小褶曲や剪断などの変形・変位があるものの、平行葉理や級化構造などの堆積時の構造も認められた。ブロックの向きは一定しないが、東区で認められた最大の粘土ブロックの走向はほぼ南北であった。これらのブロックは上町台地を構成する上町層や大阪層群と表層の遺物包含層が、斜面の

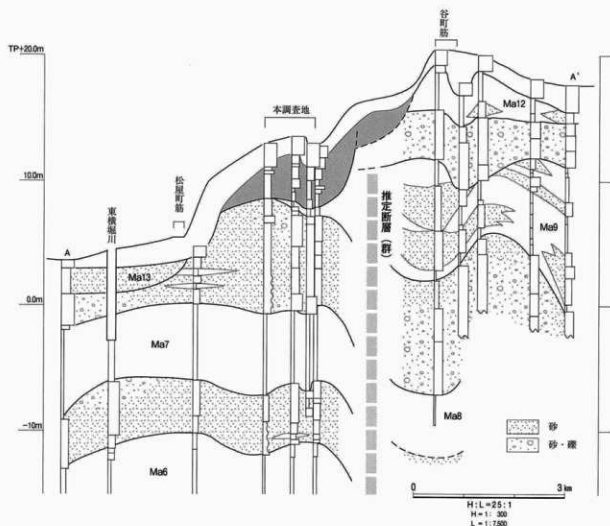


図43 調査地を通る東西地質断面図(柱状図の位置は図44を参照)

崩壊により滑落して形成されたものと推定される。

一方、上部層は東区に分布した。主として偽礫質極粗粒～中粒砂層からなり、シルト質細粒砂層を挟んで、西傾斜する下部層上面に沿って成層していた。偽礫は前置層先端部に多く認められ、大礫以下が主体で角が幾分円磨されていた。このような状況は、上部層が下部層の二次堆積物からなり、崩壊の直後に地下水の湧出や雨水により浸食されて再堆積したものと考えられる。上部層は西区南部には分布しないことから、東区以北で西に開いた二次すべりに流下した可能性がある。

一般に地すべりによる地形は、平面が緩く弧を描く滑落崖～側方崖と、その前面に崩壊物が滑動・堆積した緩斜面からなる。台地西斜面にある当該地(図44のa地点：以下、地点名のみ表記)は正にそのような地形に当たり、西に開いた孤状斜面の幅と前面の緩斜面の長さはともに200m程度である。同様の地形は、当該地の東側(b地点)や南側(c・d地点)にも認められる。c・d地点の西側にあるe地点は、高津宮が立地する独立小丘であるが、この特異な地形が岩層なだれの流れ山地形である可能性を指摘できる。また、長堀通が緩斜面の北縁を通るf地点は、幅270m、長さ360mで最大規模で、徳川期の絵図(図3)などからは、寺島家の「瓦土取場」すなわち「瓦師藤右衛門請地」はこの中にあったと推定できる。上町台地の北部には、g～j地点にも類似の地形があり、難波宮跡東南側のj地点にはすでに小規模の急崖や地すべり跡の存在が知られている[大阪市文化財協会2005・2010]。

ボーリング資料に基づいて作成した地質断面図(図43)からは、当該地付近の崩壊地層(第3層)は約4mの層厚があると推定できる。また、崩壊地背後の大阪層群中には約15mの落差のある断層(群)が推定でき、この断層(群)の弱線が崩壊の原因になった可能性がある。

2) 地すべり崩壊物の放射性炭素年代

上記のとおり確認された地すべりによる地形の形成された時期を把握する目的で、第3層中で採取された炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行った。

その結果および暦年較正結果を表9に示す。今回調査を行った試料のうち、サンプル①炭化材は補正年代値で 240 ± 30 yrBP、暦年較正年代でcal AD1648～1666年(σ ：相対比66.2%)を示している。

表9 放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

試料名	状態	測定値 BP	$\delta^{13}C$	補正年代値 BP	暦年較正				Code No.
					誤差	cal AD	cal BP	相対比	
サンプル① 東区東豊 炭・焼土層	炭化材 (針葉樹)	250 ± 30	-25.90 ± 0.36	240 ± 30 (236 ± 25)	σ	cal AD 1648 - 1666	cal BP 284 - 302	0.662	IAAA- 90777
						cal AD 1784 - 1795	cal BP 155 - 166	0.338	
					2σ	cal AD 1637 - 1680	cal BP 270 - 313	0.600	
						cal AD 1764 - 1809	cal BP 150 - 186	0.349	
						cal AD 1939 - 1950	cal BP 0 - 11	0.052	
サンプル② 東区東豊 炭・焼土層	炭化材 (サクラ属)	320 ± 30	-25.37 ± 0.49	310 ± 30 (313 ± 27)	σ	cal AD 1521 - 1577	cal BP 373 - 429	0.673	IAAA- 90778
						cal AD 1582 - 1591	cal BP 359 - 368	0.091	
					2σ	cal AD 1621 - 1641	cal BP 309 - 329	0.235	
						cal AD 1689 - 1693	cal BP 347 - 461	0.767	
						cal AD 1610 - 1647	cal BP 303 - 340	0.233	

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) 暦年較正はRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and P J Reimer)を使用

5) 暦年較正計算には丸める前の補正年代値(括弧内の値)を使用している。

6) 暦年較正結果は暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

7) 暦年較正年代値の統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

8) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

一方、サンプル②炭化材は、補正年代値で 310 ± 30 yrBPを示し、暦年較正年代でcalAD1521~1577年(σ : 相対比67.3%)を示している。

以上を踏まえ、地すべりの時期については、第IV章にまとめて述べることにする。

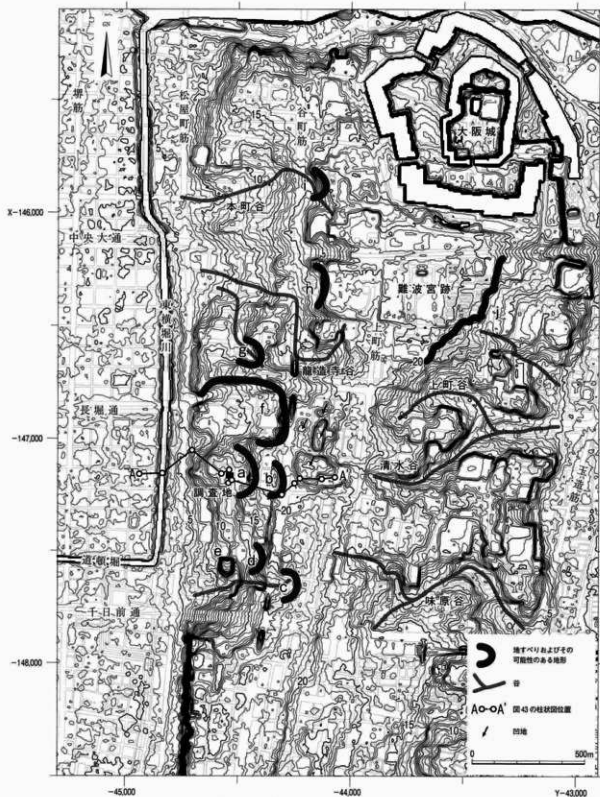


図44 上町台地北部の推定地すべり地形分布図

第2節 瓦の検討

調査地は江戸時代の大坂三町人の一である寺島家の屋敷地に当る。したがって生産直後に投棄された製品はおろか、使用後廃棄の瓦も徳川期のものは寺島家およびその配下の製作と考えられる。

寺島家は「御用瓦師寺島家文書」[大阪市史編纂所1984]によると1867(慶応3)年に没する11代三八で途絶え、徳川幕府解体と運命を共にしたようで、明治時代の寺島関係史料収集も他家蔵の筆写本によっている。徳川期においても寺島家の歩みは決して平坦な道のりばかりではなかった。18世紀前半に他国瓦が大坂三郷に流入し、寺島家配下の瓦工の仕事を奪い始めた。1739(元文4)年から「(三郷)町中他国瓦商売致すまじく候」あるいは「寺島藤右衛門支配の瓦葺きどもに葺かせ申すべく候」という触書が、1741(寛保元)・1748(延享5)・1770(明和7)・1781(天明元)・1795(寛政7)年とたびたび出された。1741年の触書では他国瓦と並んで泉州在瓦が挙げられ、大目にみていた瓦屋根の修繕ですら、1781年には半日雇の手間がかかる分は、寺島家支配の瓦葺きに任せるよう規制を強化している。また寺島家瓦を強要する地域も三郷町中から、1781年触書では北は北野村、西は西九条村、南は天王寺村まで拡がり、1795年触書では南西は三軒屋・今宮村、東は中道村などは現在のJR環状線内を網羅する範囲となっている。19世紀直前の都市大坂が膨張することがわくと同時に、他産地瓦に押される寺島家が如何に商売に危機感をもっていたかが窺える。

さて今回の遺構の大半は廃棄土壌で、瓦埴類において軒瓦を多く出すSK01・06・70・82は道具瓦、刻印瓦に関しても突出した出土状況である。廃棄土壌には家屋破棄後のゴミ穴と瓦生産時の不良品を捨てる物原が考えられる。葺土が付着した刻12が出土したSK86は前者のゴミ穴と考えられるが、SK01・06・70・82は物原の可能性が高い。現にSK01からは黒餅紋軒丸瓦6、SK06からは「本」字紋軒丸瓦10、SK70からは龍紋軒丸瓦2・菊花紋滴水瓦70・窯道具・焼け歪んだ瓦、SK82からは「神咒寺灌頂堂」瓦範1・藤巴紋軒丸瓦3・窯道具・焼け歪んだ瓦が出土し、外注を受けた寺紋・神紋の瓦範や瓦、不良品や窯道具が数多く見つかった。龍紋軒丸瓦2の同範瓦と思われるものに、兵庫県姫路市龍門寺開山堂の瓦があり、10は異範であるが大坂市北区中崎町遺跡(NZ09-2次)から同文瓦が出土している。

兵庫県西宮市神咒寺には現在灌頂堂はない。しかし同じ真言宗御室派の寺院である奈良県宇陀市室生寺が、灌頂堂を本堂としている例から推しても、神咒寺も灌頂堂がある時点で本堂となされたことが考えられる。神咒寺年表[神呪寺2009]をみると、1713(正徳3)年から1719(享保4)年にかけて諸堂を建立し、1749(寛延2)年、本堂を現在の場所に移し、1839(天保10)年、本堂の棟が崩落



図45 龍門寺開山堂の龍紋軒丸瓦

し、1841(天保12)年に再上棟したとある。本堂関係の瓦とすると1719年、1749年、1841年が製作年の候補となろう。また龍門寺開山堂は1693(元禄6)年に創建されている。出土したSK70との時期差は大きいが龍紋軒丸瓦2の製作は1693年に近い頃と考えられよう。寺島家は江戸城や京都の禁裏・院中の瓦だけではなく、京都府大山崎町の「山崎神宮寺[京嶋寛2008]」など名刹の瓦も作っていた。神咒寺や龍門寺も同様の雷給関係にあったと考えられる。

軒平瓦や軒棧瓦軒平部の近世大坂瓦に特徴的な橋文は、図17の分類によると、中心飾では実の下に短い茎をもつⅡ類が多く、唐草は子葉がY字(β類)で、唐草と子葉の関係がⅡ類とⅣ類が多いことが看取できる。しかし橋文については大坂三大火の1つである妙知焼け(1724年)の焼土層から、これまで多くが採取され、まとまった瓦の報告としては住友銅吹所のⅣ2期の遺物[大阪市文化財協会1998 pp.293-305]がある。それを見るとH03-05型式やS01-04型式に伴う橋文のバリエーションは、すでに1724年段階で出尽くしている感がある。ただ今回の成果から18世紀後半を中心として、橋実が柿形となって定型化していくことが判明した。

加えて、今回の大きな発見として一文字瓦の出現時期の問題がある。この瓦は軒平部の下辺が直線であり、軒九部もその直線から下にはみ出さないことから軒先に整頓された軽快感があり、京都の町屋などで愛されている。従来19世紀後半以降の瓦とみられてきたが、今回SK06から出土し、18世紀後半まで遡ることが判明した。軒平部瓦当の下辺が直線的なものとして谷間瓦の谷脇の瓦当(垂れ)があるが、これらは上からみる時、平瓦部が45度に切られている。また谷脇がI03A型式のような文様をもつことは考えられない。I01-04型式は確実な一文字瓦の例である。

刻印を①-④の4種に分けたが、②と③は人名が明らかである。「傳兵衛」は「寺島之系図」によると、寺島家2代目宗左衛門の孫に鈞玄があり、兄宗兵衛の死後「伝兵衛」と改名し、1662(寛文2)年禁裏・院中の御用瓦製造に従事し、1707(宝永4)年没している。また「瓦屋九八郎」については、「寺島家文書」三によると、1704(元禄17)年正月、「御用御瓦沖船頭并筒屋半左衛門船積下申送状之事」の宛先が寺島九八郎になっており、同年4月に江戸に286万枚の瓦を送った際の年寄として「太郎左衛門」・「利右衛門」の名が見え、同書の1710(宝永7)年の「江戸新御門御用瓦寸法割付」の連名中に「瓦屋弥兵衛」がみえる(以上、[大阪市史編纂所1984]より)。実名が追えるのは18世紀初頭までの人物だが、子孫が襲名した可能性も考えられよう。

江戸遺跡の刻印瓦の出土状況をまとめた金子智氏[金子智1998]は、18世紀中葉を境として、それ以前の刻印は製作者個人に属し、以後は瓦屋に属し商標的な意味を有する可能性を考え、「18世紀以降都都市近隣の瓦生産が活発化していく段階で生じた、瓦生産者の自己の製品に対する意識の変化」とした。江戸での画期も18世紀中葉に認められることから、刻印②・③種も18世紀中葉～後葉の可能性が高いように思われる。いずれにしても大坂寺島家の中枢あるいは配下の瓦工の刻印である。

「寺島家文書」にはみえない名前だが、江戸遺跡出土の刻印瓦にみられるものとして、「大坂植田彦左衛門」がある。刻14とは別判ではあるが、東京都富士見二丁目遺跡から「大坂植田彦左衛門」の刻印瓦が2種出土している。同遺跡出土瓦の中心的な年代は19世紀前葉～中葉という[武蔵文化財研究所2006]ことも、今回の出土瓦を考える際の参考となろう。

第3節 近世における瓦屋町周辺の陶器生産

1) 遺構ごとの出土傾向

第II章で報告した陶器生産に関係する遺物を遺構ごとにまとめて見てみよう。

こうした遺物がもっとも多く出土した遺構はSK39である。陶器土型324・326～328・330・331、輪トチ347・348、棚板355、素焼き陶片361が出土した。陶器土型はすべて土師質焼成である。324は踏み返しの元型と推定した。図化していないが棒状土製品も3点ある。また、検出中の出土で確実ではないがこの遺構から出土した可能性があるものとして、陶器土型(土師質焼成)325・329、輪トチ346(+図化していない1点)、棒状土製品353がある。これらを含めると関係する遺物の3割以上がこの遺構から出土したことになる。19世紀前半の陶磁器が共伴する。

他の遺構からは1点から数点の遺物が出土している。年代の古い順に挙げていく。

18世紀前半の陶磁器に伴うものとしては、SK33から輪トチ345・棒状土製品354、SK15から円錐ビン350が出土している。ただし、陶磁器は少量であり、輪トチ345が上げ底状の土瓶に伴うものであることから年代の降る可能性のあるものも含まれる。

18世紀後半の陶磁器に伴うものとしては、SK17から陶器土型(瓦質焼成)335・336、SK86から陶器土型(瓦質焼成)332、SK06から輪トチ340・342、SK23から三脚付板トチ349、SK08から匣鉢339、棚板356、窯体片357、素焼き陶片359・360が出土している。このうち、SK08は陶磁器が少量のため新しい時期の方へ幅をもたせて考えておくべきかもしれない。

18世紀後葉～19世紀前葉の陶磁器に伴うものとしては、遺構検出中の出土で可能性のあるものを含めると、SK55・56から陶器土型(瓦質焼成)333・334、SK01から匣鉢337・338、輪トチ341・343・344および図化していないもの1点、SK70から円錐ビン351と図化していないが輪トチが出土している。

19世紀前半の陶磁器に伴うものとしてはSK39のほかに、SK69から素焼き陶片358と図化していないが匣鉢片、およびSK78から図化していないが棒状土製品が出土している。

棒状土製品352のみは遺構が特定できなかった。

上記の結果によるかぎり、調査地周辺での陶器生産は降っても18世紀後半には始まっており、19世紀前半まで行われていたと考えられる。開始年代は18世紀前半に遡る可能性もある。また、陶器土型は瓦質焼成のものが先行し、その後19世紀に入ってから通有の土師質焼成の土型が現れているように見える。資料数が少ないので、これが偶然によるものかどうかを判断し難いが、332～334に見られる土型に切れ目を入れて紐で固定したかのような使用法は土師質焼成の土型では見られないことから、工人の違いと考えることもできよう。

2) 製品の内容とその系譜

本書で報告した陶器生産に関係する遺物の出土量はわずかであり、物原の中心部における廃棄物とは考えられないが、陶器成形のための土型、素焼きされた半製品、本焼き焼成に用いる窯道具、およ

び窯体片と、陶器生産におけるほぼすべての工程の遺物が揃っていることから、同じ敷地内あるいはそう遠くない近辺に陶器工房が存在したことは確実である。では、その工房ではどのような製品が焼かれていたのか。焙焼した失敗品など、確実に製品と特定できるものが出土していないので、少数の素焼き陶片と土型からうかがうしかないが、それらを手がかりに推定を試みる。

まず、素焼き陶片には358の輪花鉢、359・360の土瓶、361の土瓶・鍋・行平の底部がある。358については、本焼き製品でこのような陽刻された文様の鉢は類を見ない。青磁などの磁器焼成ならばありうるかもしれないが、窯道具の組成からみて磁器生産は今のところ可能性が低い。とすれば、これら以外の選択肢としては交趾(≡華南三彩)を写した軟質施釉陶器の製品が挙げられる(註1)。この種のやきものの窯は連房式登窯より小規模であることから痕跡を残しにくい。かつ、素焼きののち低火度で掛け焼けるので歩留まりが良く、もともと遺物の総量が少ないとはいえ、失敗品が見られないのはそういう要因もあるとみられる。一方、359～361は連房式登窯で本焼きされる一般的な土瓶・鍋・行平と考えられ、型成形によって立体的な文様をもつものは類例がない。型成形の製品とは別に、日用雑器を大量生産していたと考えておく。この工房の作業期間のうち、ある段階に連房式登窯があったことは、匣鉢・輪トチ・棚板などの遺物から明らかである。

次に土型からは、上で素焼き陶片358から推定した交趾写しの軟質施釉陶器の製品のほかに、京焼の青木木米の作品などから青磁・白磁などの連房式登窯の製品が推定できる。急須や湯沸などの伝世品がある。ただし、この場合も磁器質ではなく、陶胎で焼成された本焼き製品であった可能性が高い。

交趾写しは、京都では樂家や永樂家の作品のほかに奥田頼川や青木木米といった京焼の陶工の作品がよく知られている。16世紀末から続く樂家をのぞけば、型成形による優れた茶器をつくった木米が活躍したのは19世紀前葉で、その型成形の技術は頼川門下の兄弟子でもともと伏見人形師の出身であった欽古堂亀祐から学んだとされる。代々千家十職のひとつの土風炉職人であった西村家が陶器生産を手がけるのも19世紀前半の永楽了全・保全のころで、交趾の優品を残している。また、それらよりも古い伝承をもつものに源内焼[五島美術館2003]がある。源内焼は、18世紀後半に平賀源内の指導により始められた陶器とされるが、現在残る作品のすべてに源内が関与したとは考えられず、18世紀後半から19世紀にかけて焼かれた型成形の皿・鉢を主体とする特徴的な交趾写し製品に対する呼称といえよう。今回調査地の型成形による製品に交趾写しが含まれるとすれば、こうした源内焼や京焼の作品群との共通性が高いと考える。

上記のやきものと調査地との係わりを考える際に興味深い史料がある。延享(1744～1748)版の『難波丸綱目』によれば、近世において今回調査地を含む「南瓦屋町」は、「土火鉢」「土人形」「土焼物類(石焼物=磁器に対する陶器の意味か)」に関係する土地であったようである[多治比・日野羅1977]。今回の調査では18世紀の前半まで遡る遺物は多くはないが、たとえば「土火鉢」は瓦質や土師質の土風炉・火鉢・火消し壺などの製品一般を指し、付近で瓦生産が行われていたのは確実であることから、こうした製品が焼かれていた可能性は高い(図30-土師器提炉243に「南瓦屋町」の線刻がある)。また、土人形の土型も今回の調査で出土している。前項で述べたように瓦質焼成の土型が先行するよう見えるのが偶然でないならば、土風炉類の生産に土人形の型成形技術が結びつき、それに軟質施釉陶器の技術

や連房式登窯の技術、および金属加工・ベンガラ生産など釉薬や着色顔料を調達しやすい条件などが加わって、陶器生産が始まり展開したという想定も不可能ではないであろう。

重要なことは、京焼において伝世品や史料から型成形や交趾写しが盛んになることが確認できるのが19世紀前葉なのに対して、今回調査地の資料が運くみても18世紀後半には遡るという事実である。これは、上述したさまざまな技術が関連し合って新しい製品を生むという動きが京焼から一方的に影響を受けたものではなく、それに劣らない先進的な生産実態として大坂でも確認できたということになる。これは単なるどちらが先かという議論ではなく、都市における産業としての陶器生産がどのように発生し、営まれたかを知らうる好例として今回の成果を意義づけたい。

もう一点、今回調査地の陶器生産において検討しておくべきことは、伝世品や文献で知られる「高原焼」との関係である。

高原焼の始まりについては説が定まっていないが、鹿苑寺住持鳳林承章の日記「隔葉記」に茶器の使用記事がいくつか見られ、「森田久右衛門江戸日記」では久右衛門が大坂において見学した窯として高原焼と離波焼とが挙げられている〔船木佳代子1981〕。いずれも17世紀代の史料であり、この時期には大坂の窯場として一定の評価を得ていたことは確かである。しかし一方で、18世紀以後の高原焼については明らかでないところが多い。現在確認できる伝世品も18世紀以後は楽茶碗が目立ち、また、先に紹介した延享版『離波丸綱目』では、「楽茶碗焼物師」として「高原 高原平三郎」の名があり、安永(1772~1781)版にも「楽焼物師」として同じ名が見えるが、これらを17世紀の高原焼の系譜上に置いて良いかどうかは疑問である。今回調査地の陶器生産との関係も、上で推定したように交趾写しを焼いていたとすれば何らかの関係を想定できるかもしれないが、これ以上の検討は難しい。

3) 小結

これまで、今回調査地の陶器生産に関係する遺物をもとに、その工房の製品の推定や「高原焼」との関係について述べた。近世大坂における陶器生産は、現在では吉向焼がその流れをひくのみであり、伝世品や文献もわずかなものに限られていたが、近年少しずつ蓄積されつつある考古資料によってようやくその実態が明らかにされてきた〔佐藤隆2005b〕。今回の出土遺物は他の窯跡出土資料に比べると量も少なく、工房のほんの一部分を垣間見たにすぎない。しかし、陶器成形の土型は大坂における初めての発見例であり、それらを中心に検討した今回調査地における18世紀から19世紀にかけての陶器生産の実態は、京焼に劣らない先進的なものであった。どちらの陶器生産も瀬戸・美濃や肥前といった大生産地とは異なる、都市における手工業という性格を共有しており、安価な大量流通品にはない付加価値が必要とされたと考えられる。個々の陶工の名前がその作品とともに現在に残るという点はいかに京都らしいブランド創出の結果であるが、大坂ではそれとは異なった経営戦略があったのかもしれない。そうした問題を検討していくうえでも今回の成果は貴重な資料であるといえる。

註)

(1) 製品の内容を推定するにあたっては京都国立博物館 尾野善裕氏の助言を得た。

第Ⅳ章 まとめ

調査地は徳川期の瓦生産地として知られる地域であり、見つかった遺構は17世紀末～19世紀前半で、特に18世紀後半以降に盛行する。遺構のうち大量の瓦を廃棄した大型土壌が特徴的である。

出土遺物は瓦が最も多い。多種多様な瓦質製品が多く出土したことも瓦生産地ならではの特徴であろう。中には用途不明なものも多く、各種の道具や民俗例との比較を通じた検討は今後の課題である。

瓦生産に係わっては、利用状況からみた場所としての位置付けと、その時期について一定の手掛かりを得ることができた。窯と断定できた遺構はないため、当該地が瓦の焼き場であった確証はない。一方、瓦範1が出土したほか、多数出土した支脚型瓦質製品が瓦の窯道具であろうこと、焼け歪んだ瓦が出土していることなどから、周辺で瓦を生産しつつ、その廃棄物を含むゴミの捨て場として利用されたと考えられる。遺構の形成は18世紀前半ごろまでは低調であり、瓦生産とからんで活発になるのはその後の時期である。多量に瓦が投棄されたSK01・02・06・70・82などの時期は18世紀後半ないし後葉～19世紀前葉で、遺構の形成が盛行する時期と一致する。これらの遺構に瓦の不良品や不要となった瓦窯道具が混り、このころ近い場所で盛んに操業されたのであろう。ただし、寺島家が徳川から瓦屋町に宅地を賜ったのが1615(元和元)年で、その北東の地を「瓦土取場」とするのが1630(寛永7)年であることから、瓦屋町全体での操業開始は徳川期の初めに通り、そのうちの当該地が瓦捨場として利用されるのが18世紀後半以降であったと理解される。

瓦そのものについてもいくつかの新知見があった。第一に、軒瓦では先の瓦範1に刻まれた「神咒寺灌頂堂」をはじめ、有力寺院や武家・公家を含む外部の受注によるとみられる瓦があり、寺島家と需給関係にあった相手について考古学的な手掛かりを得ることができた。第二に、従来18世紀前葉まで検討が進んでいた軒平・軒棧瓦の橋文が、18世紀後半を中心として橋実が桁形に変化し、定型化していく様相を捉える基礎的な資料を提示することができた。第三は18世紀代に遡る遺構から一文字瓦が出土したことで、従来19世紀後半以降と考えられてきた出現時期を再検討する契機となろう。

以上の瓦産業に関係する成果のほかに、異なる産業の存在を示す資料が見つかった。

陶器生産では、18世紀前半ないし後半から19世紀前半にかけての遺構から、少量であるが土型、素焼きの半製品、窯道具、窯体片といった各工程にかかる遺物が見つかり、近辺に陶器工房が存在したことが確実となった。大阪市内では、大坂城跡の調査[大阪市文化財協会2003 pp.17-26]や、福島1丁目所在遺跡の調査[大阪市文化財協会1999]で、18世紀初頭ごろの陶器生産に係わる遺構や遺物が見つかった。今回の資料は、その文様から見た交趾写しとの関連に加えて、土型を用いる成形技法の存在から、源内焼や京焼との関係が目される点に特徴がある。また、瓦質の土型が含まれ、瓦生産との関係にも留意を要する。それらの系譜と成立時期の検討を重ねることで、近世の陶器生産における大坂の歴史的な位置付けを考えることができるだろう。

ベンガラ生産では、それを焼いた焙烙が18世紀後半～19世紀前半の遺構から多量に見つかった。こうした焙烙が発見された調査は大阪市内では3例目となる。このうちSK01の出土資料を分析した結果、鉄屑を原料とした鉄丹ベンガラを製造していたことが明らかとなった。18世紀の大坂はベンガラの産地であり、文献に記載はないものの、当該地付近でその工房が見つかる可能性は高い。緑礬を原料とする備中吹屋との関係を考える上でも重要な資料である。

金属加工品でも生産遺構は見つからなかったが、鑄造・鍛冶・銅精錬・真鍮生産の4業種に係わる遺物が出土した。おおむね18世紀後半～19世紀前半の時期である。鑄造関連のものが最多で、寺院にある半鐘や鐺口、灯籠や金属製大型鉢などに使われる部品の鑄型が顕著である。多くの寺院に囲まれた当該地では、こうした器物の工房が付近にあって不思議でないが、炉や羽口など、より現地性を示す遺物がないため、工房の中心は少し離れた所であろう。例えば1617(元和3)年と宝暦年間(1751～64)には、当該地の南側に大谷相模屋藤原正次の鑄造工房が営まれた記録があるが〔伊藤純2003〕、現状では鑄物屋を特定することは難しい。鍛冶については、大阪市域の近世の調査で頻繁に見つかるような規格性の高い羽口が出土している。寺院の普請で必要となる釘や鋸などの建築材料を製作していたのであろう。一方、銅精錬や真鍮地金の製作には相応の規模の工房(工場)が必要であるが、これまでの周辺調査ではその存在を示す情報は得られていない。

ミニチュア土製品は、『難波丸綱目』にも「南瓦屋町」の産物として「土人形」があげられるが〔多治比・日野編1977〕、その実態は不明であった。今回、ミニチュア土製品とそれに対応する型が見つかり、製作地を具体的に絞り込む手掛かりが得られた。また、従来の調査で例のなかった瓦質の天神や女性立像、槽などの製品や瓦質の型が見つかり、ここでも瓦生産との関係を考慮する必要が生じている。

以上のような瓦以外の各種産業を示す資料が、瓦の生産に関連して作られた遺構で共存していることは、その出土状況が各種産業の担い手の相関関係を示していると思われる。当該地は寺島家の本拠地内に含まれ、大型土坑は主として瓦生産の過程で廃棄に利用されている。ベンガラを焼いた焙烙の場合、まとまった量の破片がその中に一括して投棄され、瓦の廃棄行為と一連の印象を与える。一方、鑄物関連の資料などは先のとおり現地性の強くない資料が散発的に捨てられており、状況が異なるとみるべきだろう。同じことは陶器生産やミニチュア土製品生産の関連資料にも該当する可能性がある。ただし後2者には瓦質の型があり、瓦生産と無関係とは考え難いことも先述のとおりである。いずれにしても、「南瓦屋町」界線の狭い範囲の中で、各種産業が密接な関係を持ちながら操業していたことが明らかとなり、その複合的な生産体制を解明するうえで、大きな手掛かりとなろう。

最後に地すべりの発生時期について、次のように考える。当該地の地すべりは、地震のような大きな変動が原因と考えられるが、放射性炭素測定年代はサンプル①が17世紀中葉、②が16世紀前～後葉を示し、その結果から地すべりの時期を絞り込むことは難しい。第3層(崩壊物層)の包含遺物は極端に少なく、近世でも開発が進んでいなかった時期の印象を与えること、わずかな遺物が豊臣期に属すること(図14-35・図18-66)から、1596(慶長元)年の慶長・伏見地震のほか、近世初頭に発生した地震によると考えることも可能であろう。今後の発掘調査の進展と対応する文献史料の調査を進めることが必要である。

引用・参考文献

- 赤松和佳2002、「大阪府下出土の肥前陶磁について」：『国内出土の肥前陶磁西日本の流通をさぐる』、九州近世陶磁学会、pp.187・286
- 池田 研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』、pp.859～886
- 伊藤幸司1992、「近世遺構出土の埴塼と羽口」：大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第九、pp.401～406
- 伊藤 純2003、「大谷家所蔵鑄造関係史料－江戸時代の高津周辺－」：大阪市教育委員会『大阪の歴史と文化財』第12号、pp.30～37
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「天満本願寺跡発掘調査(TN04－1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.13～32
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「高津御藏跡発掘調査(KD07－1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.53～62
- 大阪市史編纂所1984、『御用瓦師寺島家文書』大阪市史史料第13輯
- 大阪市文化財協会1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』
- 1999、『堂島藏屋敷跡』
- 2000、『難波宮址の研究』第十一
- 2003、『大坂城跡』Ⅶ
- 2004、『堂島藩大坂藏屋敷跡』Ⅱ
- 2005、『難波宮址の研究』第十四
- 2009a、『大坂城跡』Ⅹ
- 2009b、『大坂城跡』Ⅺ
- 2010、『難波宮址の研究』第十六(近刊予定)
- 大橋康二・西田宏子1988、『古伊万里』
- 大橋康二1995、「寛永以降の唐津焼の変遷」：『第5回九州近世陶磁研究会資料』、pp.5～6
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帳』日本色研事業
- 鹿取一男1993、『美術鑄物の手法』アグネ技術センター
- 金子 智1998、「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第43輯第4分冊
- 北野信彦・肥塚隆保1998、「江戸時代における鉄丹ベンガラ製の製法に関する復元的実験」：『文化財保存修復学会誌』第42号、pp.26～34
- 九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の福年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
- 京嶋 覚2008、「大坂で出土した「山崎」「神宮寺」路の瓦」：大阪市文化財協会編『華火』133号、pp.6～7
- 京都国立博物館2006、『京焼－みやこの意匠と技－』特別展覧会図録
- 京都市埋蔵文化財研究所2004a、『左京北辺四坊』
- 京都市埋蔵文化財研究所2004b、『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-10 平安京左京三条四坊十町跡』
- 吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社
- 五島美術館2003、『源内焼－平賀源内のまなざし』特別展図録

佐古慶三1970、『古板大坂地図集成』、清文堂出版株式会社

佐藤 隆2000、『実年代資料 大坂』：『第12回関西近世考古学研究会大会発表要旨』、pp.15-22

2005a、『大坂とその周辺における陶器窯の技術』：『窯構造・窯道具からみた窯業－関西産場の技術的系譜をさぐる－』関西陶磁史研究会研究集会資料集、pp.93-118

2005b、『近世大坂におけるやきものの生産』：『明山薩摩の美－万国博覧会で愛された近代大坂のやきもの－』大阪歴史博物館館蔵資料集1、pp.12-22

三田市教育委員会2004、『三田焼に関する基礎調査・史料調査事業報告書』

清水 実2006、『三井家伝来 永樂の陶磁器－了全・保全・和全－』：『永樂の陶磁器－了全・保全・和全－』三井記念美術館蔵品図録、pp.100-111

神呪寺2009、『神呪寺の歩み』(<http://www.ne.jp/asahi/kabutoyama/kanno-ji/>)

瀬戸市史編纂委員会1998、『瀬戸市史陶磁史篇』6

積山 洋1993、『消費地報告大坂』：『近世陶磁器の諸様相－消費地における18・19世紀の器種構成－第5回関西近世考古学研究会大会発表資料』、pp.1-23

1995、『近世大坂出土の土師質土器編年・素撰』：『大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要3 設立10周年記念論集』、pp.255-271

多治比郁夫・日野龍夫編1977、『校本 難波丸綱目』中尾松泉堂書店

趙 哲済1995、『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44

成羽町史編集委員会編1991、『成羽町史 民俗編』

畑中英二2006、『近世の信楽焼』：『江戸時代のやきもの－生産と流通－』瀬戸市文化財振興財団埋蔵文化財センター、pp.129-147

船木佳代子1981、『大坂・奈良のやきもの』：『日本やきもの集成』7 近畿Ⅱ、平凡社、pp.106-111

満岡忠成1990、『木米』日本陶磁大系第25巻、平凡社

宮本康治2002、『消費地の報告「大坂」』：『関西近世考古学研究』10、pp.1-13

武蔵文化財研究所2006、『富士見二丁目遺跡』

吉田晶子2005、『近世鋳物師の地域性－大阪府域における枚方村田中家の位置をめぐって－』：『枚方市史年報』第八号、pp.19-46

索引

索引は遺構・遺物などに関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

《遺構・遺物などに関する用語》

あ	青木木米	39, 65
	雨降り文	37
い	板トチ	42, 43, 64
	一文字瓦	14, 15, 63, 67
	イッチン	37, 38
え	絵銭	44
	円錐ビン	42, 43, 64
お	鬼瓦	14, 23
か	鍛冶	51, 56, 57, 68
	瓦范	14, 15, 62, 67
	兜	44
	鎌唐草	14, 15
	窯道具(陶器)	39, 43, 58, 64, 65, 67
	窯道具(瓦)	27, 28, 29, 30, 62, 67
	唐獅子	52, 56
	広東碗	32
	雁振瓦	15
き	菊丸瓦	14, 15
	鬼面	29
	京焼	39, 58, 65, 66, 67
	金属加工	14, 51, 57, 66, 68
け	源内焼	65, 67
こ	交趾	65, 66, 67
	刻印(瓦)	14, 15, 27, 48, 62, 63
	飯炊	56
	独楽	4, 48
さ	笹茶碗	39
	匠鉢	42, 43, 64, 65
	三田焼	39, 58
し	支脚	27, 28, 56, 67
	地すべり	60, 61, 68
	四方榑文	37
	獸脚	52, 56
	真鍮	51, 56, 57, 68
す	隅唐草	15
	隅巴	15, 29
	素焼き陶片	39, 43, 64, 65

せ	瀬戸美濃焼磁器	37, 38
	銭壺	38, 39
	埴	15, 23
た	高原焼	66
	竹形	52, 56
	棚板	42, 43, 64, 65
	谷間瓦	15
ち	鋳造	51, 52, 56, 57, 68
つ	撞座	52, 56, 58
	土壘	39, 42, 58, 64, 65, 66, 67
	土人形	44, 48, 65, 68
て	滴水瓦	15, 29, 62
	鉄丹(ベンガラ)	49, 51, 68
と	銅精錬	51, 56, 68
	トビガンナ	37, 38
	留蓋	15
	鳥舎	15
	土鈴	44, 48
	泥面子	44
な	難波丸欄目	1, 49, 65, 66, 68
に	乳	52, 56, 58
は	羽口	56, 68
	刷毛目碗	32, 37, 38, 39
	半鐘	52, 56, 68
へ	ベンガラ	9, 10, 13, 14, 23, 48, 49, 51, 66, 68
ほ	棒状土製品	42, 43, 64
	焙烙	9, 10, 13, 48, 49, 50, 68
ま	飯事道具	44, 48
み	ミニチュア土製品	14, 44, 48, 68
む	麦藁手	38, 39
め	銘文	52
	面戸瓦	15
も	紋瓦	14
や	焼け歪んだ瓦	29, 62, 67
よ	窯体	39, 64, 65, 67
	鎗碗	37
り	龍頭	52, 56, 58

る	増堀	56, 57, 58
ろ	緑礮(ベンガラ)	49, 68
わ	輪トチ	42, 43, 64, 65
	鋸口	51, 68

〈地名・遺跡名ほか〉

か	灌頂堂	14, 62, 67
	神咒寺	14, 62, 63, 67
こ	高津宮	60
て	寺島(家)	1, 14, 49, 60, 62, 63, 67, 68
ひ	備中吹屋	49, 68
み	南瓦屋町	1, 37, 49, 65, 68
や	山崎神宮寺	63
り	龍門寺	62, 63

**Archaeological Report
of the
Kawarayamachi Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Construction of
the Shin-Kozu-Building

November 2009

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

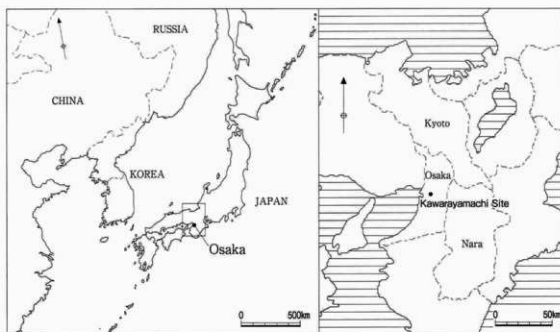
The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SD: Ditch

SE: Well

SK: Pit

SP: Pit or Posthole



CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Background and Progress of Research	1
S.1 Background and progress of research	1
1) Background of research	1
2) Progress of research	1
Chapter II Investigation Results	3
S.1 Stratigraphy	3
S.2 Features	7
1) Features of the Tokugawa period	7
S.3 Artifacts	14
1) Tiles	14
2) Artifacts related with roof tile production	27
3) Unidentifiable artifacts and tools made of tile clay	29
4) Ceramic and pottery	32
5) Artifacts related with ceramic production	39
6) Clay figurine and artifacts related with clay figurine production	44
7) Artifacts related with red oxide production	48
8) Artifacts related with metal production	51
9) Other remains	57
10) Shell remains unearthed at the SK82	57
Chapter III Examination of stratigraphy and artifact	59
S.1 The slope failure at the northern tip of Uemachi upland and radio carbon dating	59
S.2 Examination of roof tiles	62
S.3 Ceramics production of early modern period in Kawayayamachi area	64
Chapter IV Conclusion	67
References	69
Postscript	
Index	
English Contents	

ENGLISH SUMMARY

Introduction: development and excavation

This report details the results of an excavation project carried out at the Kawarayamachi site, for the first time, in Chuo-ward of Osaka city in fiscal 2008.

This site situated at outer side of south-western edge of So-gamae of Toyotomi phase Osaka castle. Although the archaeological excavation had not been carried out at the site, it was well known as the production area of rooftiles, which is indicated by its town name (Kawara mean rooftile). The rooftile factory was managed by Terashima family as a purveyor to the Tokugawa shogunate. According to the drawing of Edo period, the investigated area is presumed to be adjacent place of exploiting the clay for rooftile production.

Discoveries at the Kawarayamachi site

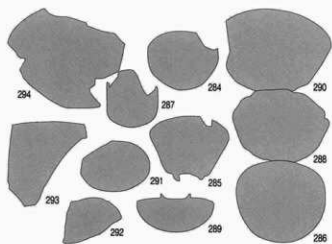
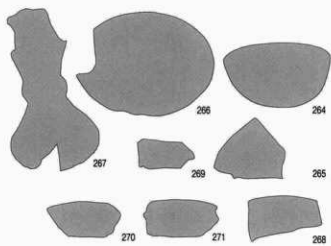
In this investigation site, the features related with rooftile production, kiln site or workshop, were not discovered. But large sized pit filled with a lot of rooftile, many pits and ditches were detected. A few features are considered in the end of 17th C, most of them are late 18th to early 19th C.

From these features the artifacts related with rooftile production, as rooftile with stamped inscription of 20 types, mold for eaves tile made of tile clay, kiln furniture for rooftile production, varieties of objects made of tile clay, were excavated. In addition to these, mold and kiln furniture for ceramic production, mold for clay figurine, parching pan for producing iron oxide, mold for bronze objects, were also discovered. This discovery suggests that the area was an industrious complex not only for rooftile production but another industry, so it is considered as much important area for researching the industry in the early modern Osaka.

報告書抄録

ふりがな	かわらやまちいせきはつつちょうさほうこく							
書名	瓦屋町遺跡発掘調査報告							
編著者名	清水和明・黒田慶一・宮本佐知子・佐藤 隆・川村紀子・池田 研・北野信彦・伊藤幸司・趙 哲賢・宮本康治							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2009年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かわらやまち 瓦屋町遺跡	大阪市中央区 瓦屋町1丁目	27120	-	34° 40′ 21″	135° 30′ 51″	20081113 ～ 20081226	500㎡	ビル建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
瓦屋町遺跡	城下町	豊臣期				瓦		
		徳川期		土壇・溝・小穴		瓦・瓦窯道具・陶磁器・陶器土型・陶窯 窯道具・ミニチュア土製品・ミニチュア 土製品土型・ベンガラ生産用焙烙・鋳造 製品鋳型・鍛冶関連遺物・その他金属加 工関連遺物		
要 約	本書は、瓦屋町遺跡の最初の発掘調査成果を報告するものである。本遺跡は豊臣氏大坂城では惣構の西南部の外側に接する位置にあたる。これまで発掘調査が付近で行われたことはなかったが、町名が示すとおり、一帯は徳川期に大規模な瓦の生産地帯であったことが知られている。 今回の調査地では、窯などの生産遺構を確認することはできなかったが、18世紀後半～19世紀前半をはじめとするいくつかの大型土壇から、大量に投棄された瓦が見つかり、軒丸・軒平・軒椀瓦などの詳細な型式分類を行った。瓦には南瓦屋町で操業していた幕府御用瓦師「寺島家」との関係を示す刻印が多数見つかり、ほかに瓦製の瓦棺、瓦製作に使われた窯道具、同じ窯で焼成したと考えられる各種の瓦質製品などが共存し、瓦の生産地ならではの多数の遺物を報告した。 加えて、陶器土型や陶窯の窯道具、ミニチュア土製品とその土型、ベンガラを焼いた焙烙、金属加工品に係わる鋳型や鍛冶関連資料など、瓦以外の各種製造業が付近に存在していたことを示す遺物も見つかり、周辺一帯が複合的な工業生産地域であったことがうかがえる。 また、徳川期の遺構の基盤になっている地層が、大規模な地層の崩壊と再堆積を示す崩壊物層であることが判明した。							

原 色 図 版

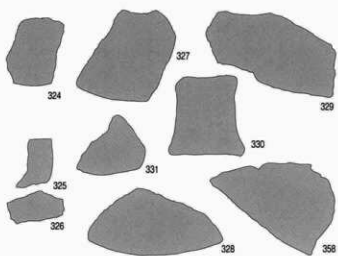




SK35出土陶磁器・土師器



SK70出土陶磁器

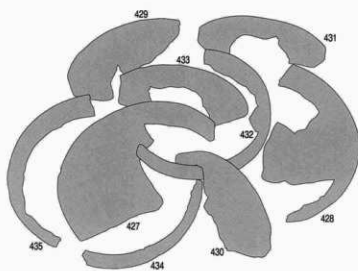
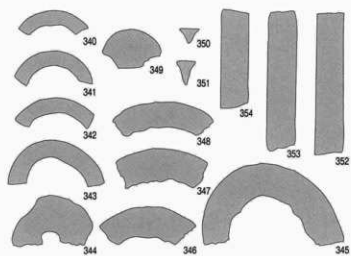




製品側の面(右下358のみ素焼き陶片)



上と反対側の面

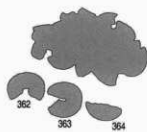




トチン類・円錐ピン・棒状土製品



ベンガラを焼いた焙烙





SK82出土ミニチュア土製品



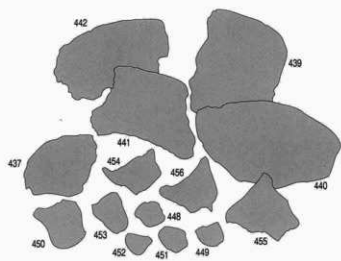
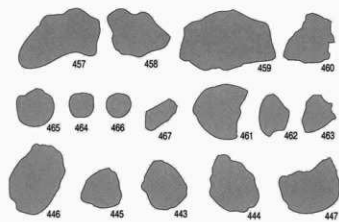
ミニチュア土製品の型(動物)



ミニチュア土製品の型(箱庭・飯事)



SK35出土ミニチュア土製品(絵銭)





竹形・龍頭・乳・銘文・撞座・唐獅子の鑄型(込型法)



粗型・罎口(挽型法)、獸脚(込型法)

圖 版

西区全景(南から)



東区全景(南から)



西区北部遺構群
(東から)





南部遺構群(北東から)



SK01の埋土堆積状況
(西から)



深掘りトレンチ地層断面
(東から)

東部遺構群(北東から)



SK69の埋土堆積状況
(南から)



SK70の埋土堆積状況
(北西から)





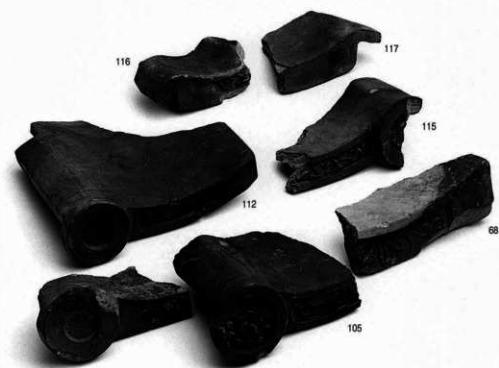
SK82の埋土堆積状況
(南東から)



深掘りトレンチ地層断面
(南西から)



崩壊物層中の炭化物堆積層
(南西から)



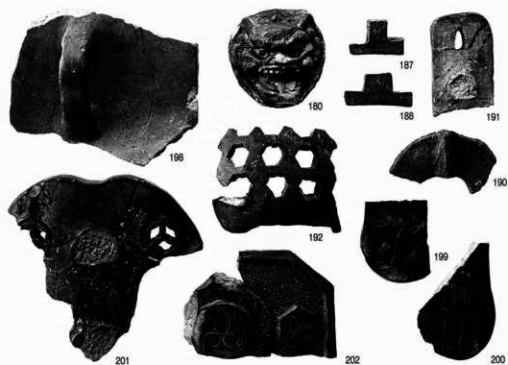
軒平瓦・軒棧瓦・一文字瓦・鎌瓦



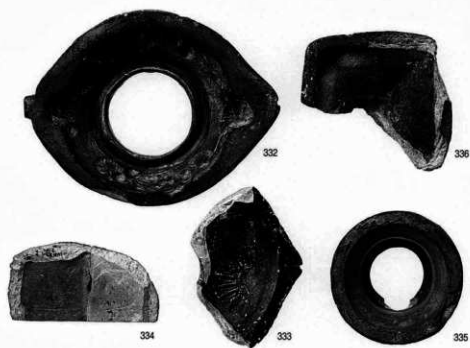
蟹面戸瓦・蟹面戸瓦・鳥袈裟瓦・雁振瓦ほか



用途不明瓦質製品・道具類(1)



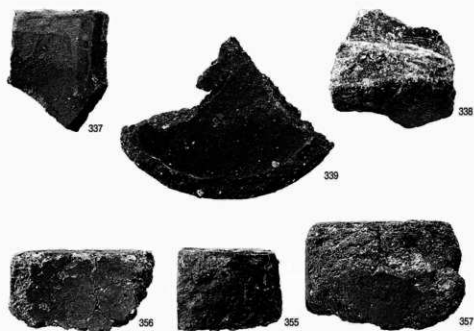
用途不明瓦質製品・道具類(2)



製品側の面



上と反対側の面



匣鉢・棚板・窯体片



ミニチュア土製品(瓦質)

大阪市中央区 瓦屋町遺跡発掘調査報告

ISBN - 978-4-86305-023-5

2009年11月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

〈TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272〉

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-1-14

**Archaeological Report
of the
Kawarayamachi Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Construction of
the Shin-Kozu-Building

November 2009

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Kawarayamachi Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Construction of
the Shin-Kozu-Building

November 2009

Osaka City Cultural Properties Association